



# 超古代正史 伝説の国編



伝説の国の正しい位置  
オリジナル人類の姿  
正しいイスラエルの歴史を  
説いています

大本正

# 目次

---

## 人類の歴史200万年 超古代正史

### 伝説の国々編

#### 目次

#### 第一章アフリカの超古代史

- 最古の人類集団モリモ、ムワリ、アブク～小人族の出現
- 第2の人類集団チュクウ～獣人イエティの出現
- 第3の人類集団クウォス、エス、レザ、ムシシ～アボリジニ、メラネシア人、パプア人の出現
- 第4の人類集団カアング、ジェンギ～コイサン族の出現
- 第5の人類集団オロクン、オロルン～ミャンマー少数民族、シベリア少数民族、東アジア人の出現
- 第6の人類集団ジュオク、イマナ～金髪・碧眼・白人、ベトナム少数民族の出現
- 第7の人類集団エバシ、ウェネ、ニヤメ～アパッチ族、アイヌ族、台湾原住民の出現
- 第8の人類集団トレ、ヴィディエ～ドラヴィダ族、ヴェッダ族の出現
- 第9の人類集団キャラ、ルワ、アシェラーフ～ソマリア人の出現
- 第10の人類集団ジョク、スク～獣人イエレン、獣人アルマスの出現
- 第11の人類集団ディンカ、マベエ、ザムビ、ムルング～シベリア人、ミャンマー人の出現
- 力と知恵の象徴スフィンクス アダム、カイン、アベル、セツの王国
- バントゥー族のアフリカ大移住 ピグミーの顔を持ち、獣人の卓越した身体能力を持つ新人類
- ヴォドゥン王国 テングリとピグミーが築いた国
- 第12の人類集団マサイ、シルック～インド人、中央アジア人の出現
- エロヒム 黒い肌の神の出現
- 朱雀（ツークエ） 大地殻変動の亡命者がナイジェリアに築いた国
- 初代ターバイ王国 サハラを統治した科学の種族の伝説の国
- ソドムの国 リビア、チャド、スーダンを統治した古代国家
- 第13の人類集団イサック～カナン人の出現
- 最新の人類集団ハダメ～アラビア人、タミール人の出現

#### 第二章東南アジア・メラネシアの超古代史

- 人類第2の聖地チッタゴン

- アマゾン 台湾～福建にかけて築かれた南シナ海を統治した国家
- エティオピア王国 マレー半島～メラネシアを統治した伝説の国
- アウトリガーカヌーの発明 人類の大冒険時代の予感
- 高天原 天照大神が統治した台湾の国際都市
- 太陽神ミトラの国 ボルネオを統べたミツライムの国

### 第三章中国・シベリア・蒙古の超古代史

- 盤古（パングア） 巨人の大地
- 巨大哺乳類の絶滅 マンモスを狩る獣人の集団
- 遊牧のはじまり アメリカから来た原初の神カオス
- 黄色人種の誕生秘話 シベリアを統べる至高神ウリゲン
- 犬戎（キロン） 冥府の河ステュクスとカロンの渡し守の国
- 神武天皇の国 大地殻変動後の黒龍江を統治した獣人の王族
- 北斗星君 北京に建設されたメラネシア人の古代国家
- 青龍（チンロング） シベリア、東南アジアの亡命者たちが築いた国
- 六十元辰 長江流域に築かれた国際都市
- 北狄（ベイディ） 南極からの亡命者ヤペテが建てた国家
- 澳門（マカオ） 南極からの亡命者レメクが建てた国家
- 神農と夏 カナンが古代中原に築いた伝説の国
- 道教 ユダヤ人の中国上陸
- 古代中原の地に立つイスラエルの士師たち 縄文人が中国に移住
- パプア人の首長 サウル王、ソロモン王のモンゴル統治
- 東北縄文人の首長 ダヴィデ王のチベット統治
- アジアを駆けるヨシュアの進軍～南北分裂時代のイスラエル王国

### 第四章アメリカの超古代史

- 巨大哺乳類の絶滅 サーベルタイガーと戦う獣人の集団
- アパッチ族 獣人に次ぐ、人類のアメリカ上陸第2団
- 太陽の王国ピラコチャ 蛭子神が統治した古代ペルーの国
- 常世の国 ユタに築かれたステュクスとエウドーラーの国
- ミドガルド王国 巨木セコイアが林立する古代カリフォルニアの地に築かれた国
- ヴァルハラ王国 戦士の守護神ヴァルキューレが統治した古代メキシコの国
- ティル・ナ・ノーグ ティアワナクとも呼ばれた常世の国

- レメクの国 御毛沼が築いた首都リマック
- アナサジ族 オナシス財閥の先祖
- 最終戦争ラグナロク 核兵器によって焼き尽くされた人喰い人種たち
- チムー王国 シュメール人がペルーに築いた国～シュメール文明誕生の地
- イスラエル王国の始まり ペルーに栄えた平和な王朝の終焉

## 第五章 アラビア・イランの超古代史

- エデンの園 ヴェツダ族とアイヌ族の国
- 至高神ズルヴァーン イラン人の誕生
- 超古代都市スーサ 素戔鳴尊がイランに築いた国
- 宿神（スシェン） 「伏羲と女禍の大航海時代」の発信基地
- 神々の集団アヌナキ 大地殻変動後の最初の大規模な国家
- マガン王国 ミケーネ文明、ロムルス王、ラーマ皇子誕生の地
- アルバ・ロンガ王国 インド洋を治めたアラビア半島とランカー島の連合国
- シュメール文明 セムとアーリア人が築いた文明
- ソドムとゴモラ タナトスと追従する大量の信者を焼き尽くした科学の種族の怒り
- ヤザダ神群 砂漠に姿を変えた土地から来た亡命者たち
- マズダ神群 砂漠に姿を変えた土地から来た亡命者たち
- ダエーワ神群 砂漠に姿を変えた土地から来た亡命者たち
- ベーシュタード王国 海の民とヒッタイト帝国の亡命者によって築かれた国
- マハーバーラタ戦争 タナトスと追従する大量の信者を焼き尽くした科学の種族の怒り

## 第六章 ヨーロッパの超古代

- エーゲ 最古の地名のひとつ～超古代の北極圏ヨーロッパに生まれた金髪・碧眼の白人
- ヨーロッパ人の大移動 金髪・碧眼のメラネシア人とアボリジニの正体
- ガイアの国ヨーロッパ ハイデルベルゲンシスの正体
- ティタン神族 オーストラリア・インドから来た獣人と神々の種族
- タナトスの王国時代 美と善の落日
- アルゴス号の大航海時代 獣人の英雄によるタナトスの虐殺と追放
- 冥府ハデス 冥界の河ステュクスと聖地デルポイの守護蛇ピュトンが氷河迫る土地に築いた国
- ピクトランド 氷上に暮らす小人の伝説
- 全能神ゼウスの時代 クロノスの虐殺と追放
- ノアの箱舟

- 夏（キア）アカイア人がギリシアに築いた国
- 玄武（クアンウー）大地殻変動の亡命者がウクライナに築いた国
- 白虎（ベイフー）大地殻変動の亡命者がアルプスに築いた国
- アイルランドの神々の時代
- ラテン王国 カスピ海のほとりにあった伝説の国
- トロイア戦争 神々と人喰い人種との戦争
- マー・トゥーレスの戦い 神々と人喰い人種との戦争
- タップ・オノスの破壊 禁忌の守護～科学を悪の手に渡してはならない

## 第七章日本の超古代史

- アイヌ族 古代イランからの訪問者
- 蝦夷（えびす）の国 東北地方、北アメリカ、古代マヤを結んだ古代連邦
- ヤマトの国 メラネシア人の顔をした大和人
- 葦原中津国 天草諸島～八代湾に存在した伝説の国
- 海神宮（わたつみかみのみや）の国 但馬国に存在した伝説の国
- コロボックル アイヌと共存した謎の小人族
- 神の島「生口」 瀬戸内海を統べたシベリアの王族
- 出羽の国 ヴァルハラ、ミドガルドの亡命者が建てた国
- 武蔵の国と蛭子神の誕生 チムー王国の王族が日本に亡命
- 龍飛岬 UFOから降り立った不思議な旅人
- 出雲国 ドルイド教による古代日本上陸
- 伊勢国 ユダヤ人のふるさと～ユダヤ教の原型である神道
- 十和田と津軽の国 ダヴィデ王とピラミッドの種族の故郷
- イスラエル王国 モンゴル、チベットに植民地を築いた高天原と葦原中津国の連合王国
- 預言者エリヤと仲間たち 南北分裂時代のイスラエルに移住した日本人の集団

## 第八章オーストラリアの超古代史

- 神統記の舞台オーストラリアに原初の神々が集う オリジナル人類の連合体が誕生
- 虹蛇の世界 知能を持つ人類のあるべき姿～真の宗教
- 反自然の種族 自然淘汰を免れることを覚えた人類のできそこないたち
- ノドの地 人喰い人種タナトスが体系化した邪な宗教
- 冥府タルタロス テュロス王国の前身
- ピサ王国 東北縄文人が築いた国

- アトランティス王国 オリンポス神族と人喰い人種が築いた国
- 製鉄の種族ティタン 楽器ディジリデューはふいごだった～タタ製鉄、トヨタ自動車の先祖
- 邪悪な帝国の滅亡 アトランティス王国の消去～地球の番人の登場
- デウカリオンの大航海時代 オーストラリアに残されたカオスの後裔

## 第九章南極の超古代史

- ムー帝国 ローマ帝国の神々の国
- 南極大陸に天孫降臨 ノア、セム、ハム、ヤペテ誕生の地
- 大地殻変動 タナトスを嫌悪する余りに地軸を揺らした科学の種族

## 第十章インドの超古代史

- ヴァラナシ 天空神ウラヌスの故郷～ジョン・レノンの故郷
- ヴァナラシ 小野氏、奈良の語源～ヨーコ・オノの故郷
- ドラヴィダ族 聖地デルポイから亡命した人々
  
- シバの王国 葦原中津国の人々がパンジャブに築いた国家
- プント国 獣人パンドラがパンジャブに築いた国家
- 第2代テーバイ王国 サハラ砂漠と化した故郷からの亡命者～インダス文明
- アーリア人の国 神々の種族の連合軍
- パーンダヴァ族 タナトスの指揮下に落ちたプント国、シバの王国の連合軍

### 人類の歴史200万年 超古代正史

#### 伝説の国々編

##### ◆まえがき

名前は、すべてのナゾの答えである。アフリカに生まれた神々の名前をトラッキングすることで、超古代人類の歴史、伝説の国家の誕生の秘密はすべて明らかになった。仮説に過ぎないが、仮説のまま終わることになるだろう。なぜなら、この仮説を物的証拠、文献によって証明することは不可能だからだ。昨日、あなたが何をしたか、何を感じたか、第三者に理解させることが不可能であることと同じだ。ただ、ひとつ言えるのは、人類は先祖の名前を大切にすることだ。それが、この壮大な仮説が正解であることの裏づけである。

また、今回痛感したことは、それぞれの国の神話の舞台が、必ずしも、現地ではないということである。神話は常に異邦人の旅人が伝えてきた。それを証明するかのごとく、どこの神話に於いても時間軸は意図的に喪失されており、舞台設定も曖昧である。その上で、現地人が聞いたままの、異邦の地でおきた歴史の破片をパズルのように組みあわせ、体系化して神話として完成させてきたのだ。日本神話も、ギリシア神話も、聖書もみな世界各地で起きた古代人の歴史の寄せ集めである。しかし、神々の名前を精査し、緻密なトラッキングを重ねることで、時間軸を呼び戻し、正しい舞台設定を確認することが可能になった。

イスラエル王国のサウル朝、ダヴィデ朝、ソロモン朝の話も、じつは、イスラエルではなく、夏時代の中国、チベット、モンゴルでおきたことである。モーゼスがカナンに移住する話は、武蔵国の人々が出羽国、津軽、十和田の縄文人たちを率いて夏時代の中国に移住する話である。サウル王、ソロモン王はパプア人の首長であり、ダヴィデ王は十和田を統べた縄文人の首長である。イスラエル王国は、葦原中津国（八代湾～天草諸島）と高天原（台湾）による連合王国であった。イスラエル王国には、武蔵国、出羽国、津軽、大和国、伊勢国が参加していた。イスラエルの宗教として知られるユダヤ教も、じつは日本の神道、中国の道教と不可分である。これらの宗教を築き上げたのがイデュイアである。イデュイアの名はユダヤ、伊勢の語源でもある。ユダヤ人の故郷は日本にあり、イスラエル王国も日本に存在した。イスラエル王国。この国が、超古代人が築いた伝説の王国時代の終焉を告げた。真のイスラエルは、最後の伝説の王国である。

## オリジナル人類の容姿

---

### ◆オリジナル人類の容姿



モリモの姿（参考ネグリト）

200万年前に生まれた最初の人類。成人男性の身長が150cm以下という特徴を持っている。彼らは、儒教（オング族）、上座部仏教（サンガ）、キリスト教（シモン・ペテロ）、イスラム教（ハーシム家）、モルモン教（ピクト人）を成立させた宗教の種族である。



アブク、ムワリの姿（参考ピグミー族）

200万年前に生まれた最初の人類。成人男性の身長が150cm以下という特徴を持っている。小さい身体ながら、象にも立ち向かう勇気と力を持つ人々である。彼等の子孫には、ピクト人、ヘカテ、ゴメル（クマルビ）、バクトリア人、賀茂氏、金氏、三浦氏、村上水軍などがある。





チュクウの姿（参考ユカタン人）

アメリカ大陸の人々には、少なからず獣人の血が流れている。彼らの身長が3 mになり、全身体毛に覆われたなら、それは古の獣人の姿の再現である。つまり、サスカッチ、イエティなどの顔はまだ知られていないが、上記のようなユカタン人、ペルー人のような顔をしていると考えられる。ときおり、メキシコに顔や体が毛だらけの子どもが生まれて話題になるが、それは獣人の隔世遺伝である。



クウォスの姿（参考アボリジニ）

アボリジニの顔は、原初の神カオスの顔である。彼らの出現は50万年前のことになる。家畜や犬を飼い、遊牧を始めた最初の人類である。彼らの亡骸は人類学者によってホモエレクトスと呼

ばれた。知に優れた人々である。



エス、レザ、ジュオクの姿（参考メラネシア人）

ジュオクの名はエーゲ海に残っている。つまり、最初の古代ギリシア人は彼らのような姿をしていた。



ムシシ、キャラの姿（参考パプア人）

ムシシの子孫には、獣人ミマース、英雄ペルセウス、全能神ゼウス、孝昭天皇（ミマツヒコ）、ミツライム、太陽神ミトラ、モーゼス、百地氏（桃太郎）、宮本武蔵が生まれている。



ウラヌスの姿（参考バングラデシュ人）

ヴァラナシを築いたウラヌスは、オロクンとエスの連合体であり、獣人アルキュオネウスの兄弟でもある。バングラデシュ人の顔をしたウラヌスとドラヴィダ族が合体してインド人の祖となった。30万年前の話である。



カアング、ジェンギの姿（参考コイサン族）

上記のカアング、ジェンギの顔をした人々は寒流が流れ込む南アフリカの海岸で水生人として暮らすことで、現在のコイサン族のような顔になった。45万年前の話である。



オロクン、オロルンの姿（参考ミャンマー少数民族）



オロクンとオロルンはカアング、ジェンギから枝分かれし、南アフリカから超古代のナイジェリアに移住した。オロクンは、永い時を経て名前を変え、オロゴンとして現在もナイジェリアに残っている。つまり、タレントのボビー・オロゴンの先祖は、もともこのような顔をしていた。



オロクン、オロルンの進化系の姿（参考シベリア人、アマゾン人）

上記のオロクン、オロルンの顔をした人々は寒流が流れ込むオホーツクの海岸で水生人として暮らすことで、現在のシベリア人、アマゾン人のような顔になった。45万年前の話である。オロクン、オロルンはウリゲン、エルリクに名を変え、現在もモンゴル神話の神々として語り継がれている。



ウエネの姿（参考アイヌ族）

アイヌの歴史は古く、40万年前のアフリカ（ニジェール流域）に生まれている。彼らはイランを経由して北海道にやってきた。その名から、ウエネス（ヴィーナス）、エノスが彼らの子孫であることがわかる。



エバシの姿（参考アパッチ族）

その名から彼らが、蝦夷（えびす）、原初の水アプスーの先祖であることがわかる。アパッチ族は、ただのアメリカ原住民ではなく、非常に古いタイプの人類である。ただ、後に人食い人種であるディネ族がアパッチの中に侵入し、女子どもを惨殺し、奴隷として売り払い、白人の頭の皮を剥ぐなどしてアパッチの名を汚した。



アシェラーフの姿（参考ソマリア人）

オケアーニス大洋の娘たちに参加したアシアー、エウローペーの顔である。



トレの姿（参考ドラヴィダ人）

聖地デルポイを築いた人々の顔である。彼等の子孫にはトロイア人、孝安天皇（ヤマトタラシヒコ）、景行天皇（オオタラシヒコ）、成務天皇（ワカタラシヒコ）、仲哀天皇（タラシナカツヒコ）がいる。



ヴィディエの姿（参考ヴェッダ族）

彼らは、オケアーニス大洋の娘たちのイデュイアを生んだ。つまり、ユダヤ人の祖であり、神道、道教、ユダヤ教を始めた人々である。



ニャメの姿（参考アミ族）

アミ族の顔は、天照大神、太陽神アメンの顔である。彼等の子孫にはハム、ヤペテがいる。



イマナの姿（参考ベトナム人）

イマナは、高天原（古代台湾）で、天御中主神や天常立神を筆頭に、天宇受売命、天忍穗耳命、天香語山命、天児屋命、天手力男命、天布刀玉命、天火明命、天善卑能命などの重要な神々を生んだ。



ルワ、マベエ、ムルングの姿（参考ミャンマー人）

マベエからはペー族、ホン族、ムルングからは慕容部、フランク族が生まれている。



ザムビの姿（参考カンボジア人）

ザムビは、セム、太陽神シャマシュ、シュメール人、鮮卑（シェンヴェイ）、スミス姓、島津氏、マーシア人、マジャール人、サハヴィー教団の祖である。





オケアーニス大洋の娘たちの姿（参考メラネシア人）

ジュオク、ウェネ、エバシ、イマナ、ニヤメ、ヴィディエ、アシェラーフ、キャラ、ルワ、トレが連合して築いた。金髪・碧眼のメラネシア人は彼らの子孫である。



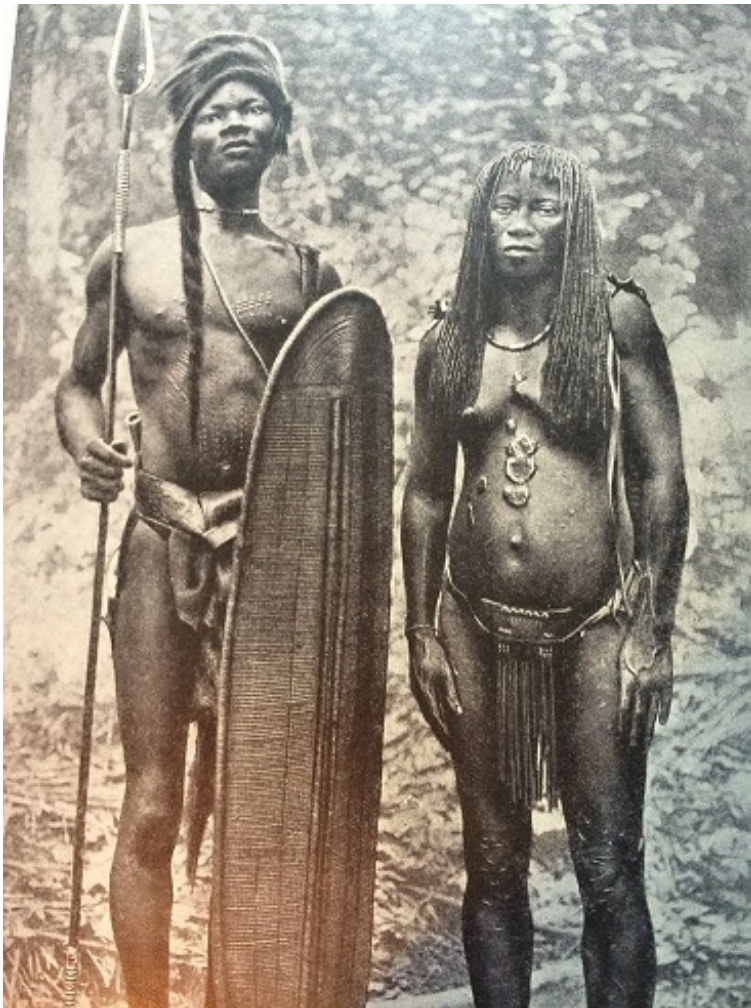
オケアーニス河川の娘たちの姿（参考サーミ人、ヨーロッパ人）

ジュオク、ウェネ、エバシ、イマナ、ニヤメ、ヴィディエ、アシェラーフ、キャラ、ルワ、トレが連合して築いた。当時の北極圏であったヨーロッパに暮らしたことにより金髪・碧眼の白人と化した。



ディンカの姿（参考ディンカ族）

頭部が小さく、手足、指が長いのは彼らが長い間、水生生活をしてきた証だ。丁零（ディングリング）、天空神テングリの祖であり、背の高いシベリア人、デンマーク人、オランダ人の祖でもある。



コトスの姿（参考バントウ族）

音楽センス、リズム感、愛嬌のあるピグミーの顔と、獣人の頑丈な体と卓越した身体能力を受け継いでいる。マイケル・ジャクソンなどのミュージシャン、カール・ルイス、ボブ・サップなどのアスリート、モハメド・アリ、マイク・タイソンなどの格闘家には彼らの血が流れている。



ジョクの姿（参考中央アジア人）

獣人ジョクが生んだスキタイ人の子孫である。つながった濃い目の眉毛は獣人の名残りである。



スクの姿（参考シク教徒）

獣人スクの子孫であり、獣人からは高い身長を受け継いでいる。





マサイの姿（参考マサイ族）

頭部が小さく、手足、指が長いのは彼らが長い間、水生生活をしていた証だ。マサイの子孫には、メシェク、陸奥氏、釈迦族がいる。



シルックの姿（参考スーダン人）

頭部が小さく、手足、指が長いのは彼らが長い間、水生生活をしていた証だ。チュルク族の祖。



イサック、ハダメの姿（参考ソマリア人）

一番新しい人類の姿である。彼らもヨーロッパで暮らして白人となった。イサックとハダメは、イサク、イッサカル族、ハタミ人、秦氏、タミール人の祖である。イサックはBC40世紀頃に出現したが、ハダメはBC6世紀に登場した一番新しい人類である。



# 第一章 アフリカの超古代史

---

## アフリカの超古代史

### ■最古の人類集団モリモ、ムワリ、アブク～小人族の出現

成人男性の平均身長が150cmという特徴を持つ「モリモ」は最初の人類であり、彼らの亡骸は人類学者によってアウストラロピテクスと命名された。あるとき、現レソトの海岸に暮らしていた彼らは、陸に上陸し、アフリカ大陸を旅立った。北上した彼らは、現ジンバブエに暮らしていた、別の異なる人類「ムワリ」と出会い、彼らを冒険の旅に誘った。更に北上した両者は、次に湖水地方を訪れると、別の異なる人類「アブク」に出会うが、彼らもモリモとムワリの冒険旅行に参加した。彼らの冒険は、食生活、環境の変化など、移動の必要に迫られたわけではなかった。彼らの冒険の動機は、異邦の地に想いを馳せるという、純粋な好奇心に基づいていた。約200万年前のことである。

モリモは、「アジアのピグミー」と呼ばれているネグリトと同じ姿をしており、ムワリとアブクは現在コンゴに住んでいるピグミー族と同じ姿をしていた。湖水地方を離れてナイル沿いにアフリカ大陸を出た彼らは、アラビア半島、インドを越え、現チッタゴンに入植した。モリモはここに「マルマ族」を残している。一方、ムワリとアブクはチッタゴンからパプアに入植し、「ムユ族」「パグ族」を残している。当初の3者は何れも小人族だったが、永年の混血によって東南アジア人、パプア人に吸収された。

アブクとムワリの子孫である「ピグミー族」は、しっかりと先祖の名を継いでいるが、一方、モリモの子孫であるネグリトは名前が無かったため、ヨーロッパ人の人類学者によって「ネグリト」と命名された。しかし、彼らはモリモの子孫であるため、ネグリトと呼ばれる以前は、モリモに似た名前を持っていたはずだ。

また、モリモの子孫たちは儒教、上座部仏教（サンガ）、キリスト教（シモン・ペテロ）、イスラム教（ハーシム家）の成立にも関わっている。更にモリモは、その名もズバリのモルモン教の名前の語源でもある。つまり、彼らは「宗教の種族」である。

### ■第2の人類集団チュクウ～獣人イエティの出現

平均身長が2m～3mという巨体を誇った「チュクウ」は、ナイジェリアの海岸に暮らしていた。彼らの遺骸は、人類学者によってギガントピテクスと呼ばれている。彼らの顔はメキシコ人に似ていたが、先祖である霊長類のように、全身は濃い体毛に覆われていた。モリモたちの次にアフリカ大陸を離れた彼らは、アラビア半島、インドを越え、モリモたちと同じように現チッタゴンに入植した。チュクウはチッタゴンに「チャク族」を残している。モリモたちは陸上生活に

スイッチしていたが、チュクウは暖流が流れ込むインドの海岸で、再び水生生活に戻った。暖流の影響により、2 m～3 mあったチュクウの身体は、更に巨大化した。ここに、最大身長4 mを誇る獣人イエティ、オラン・ダラムが誕生した。約100万年前のことである。

現在、彼らは、未確認生物として世界にその名を知られている。各々、ヒマラヤの現地人からはイエティ、マレーシアの現地人からはオラン・ダラムと呼ばれているが、自称は「チュクウ」に間違いない。つまり、チュクウと呼びかければ、彼らは呼びかけに応えるかもしれない。

根深誠著「イエティ（山と溪谷社刊）」には、イエティに遭遇した目撃者の報告が紹介されている。「イエティはヤクの二本の角を掴んで引き裂くようにしてへし折り、それから腹部をえぐって殺した。イエティは仔ヤクを岩に叩きつけてから、ヤクの腹部に顔を埋めて生き血を飲み始めた」。丸で漫画のようだが、イエティはヤクのような大きな哺乳類を、ハエでも殺すように容易に殺している。彼ら、獣人が人類の想像を超えた身体能力を誇っていることがわかる。彼らは、あらゆる時代に於いて、悪（死の種族タナトス）を成敗してきた偉大な英雄たちの祖先である。彼らは「英雄の種族」である。

### ■第3の人類集団クウォス、エス、レザ、ムシシ～アボリジニ、メラネシア人、パプア人の出現

小人族、獣人族に引き続き、アボリジニの顔をした「クウォス」、メラネシア人の顔をした「エス」「レザ」、パプア人の顔をした「ムシシ」がアフリカの地に誕生した。およそ、50万年前のことである。あるとき、現ザンビアの海岸に暮らしていたレザと、現ナイジェリアの海岸に暮らしていたエスは、クウォス、ムシシが暮らす湖水地方に赴き、4者は意気投合して、好奇心の赴くまま、故郷であるアフリカ大陸を離れ、新天地を求めて旅に出た。

一行は、人類第2の故郷であるチッタゴンを訪問し、異なる人類どうしで親交を暖めた。その後、エス、レザはミャンマーに根付き、「アツィ族」「リス族」を生み、古い系統の東南アジア人の祖となった。一方、ニューギニアに入植したムシシは、「ササク族」を生み、パプア人の祖となった。クウォスは、獣人チュクウと意気投合し、「グューエース/グューゲース」を結成した。グューゲースはキュクロプスの一翼として知られているが、同時に「ギガース」の前身でもある。

### ■第4の人類集団カアング、ジェンギ～コイサン族の出現

約45万年前、南アフリカの海岸に「カアング」「ジェンギ」が暮らしていた。彼らは、南アフリカの海に流れ込む寒流によって、他の人類とは異なる身体的特徴を得た。シベリア人ほど徹底していないが、シベリア人と同じように、彼らの身体は冷たい海水に対抗するために小型化し、顔の彫りは浅くなり、眼球保護のために目は小さくなっている。東アジア人にとって、コイサン族の顔は非常に親しみやすいものだ。

その後、カアングとジェンギからは、オロクンとオロルンが枝分かれしているが、人口過剰の状態に陥ると、オロクン、オロルンは南アフリカを離れてナイジェリアに移住した。しかし、冒険心を刺激されたカアング、ジェンギは、しばらくしてオロクン、オロルンの後を追い、ナイジェリアの地を訪問している。その時に意気投合すると、両者は、新天地を求めてアフリカ大陸を出発した。カアング、ジェンギ、オロクン、オロルンの一行は、他の人類と同じように、現チッタゴンに入植した。その後、「バンコー族」となったカアングは、獣人の連合体を率いて古代の中国に入植した。現地はバンコーの名を採り、巨人の大地「盤古（パングア）」と呼ばれた。

## ■第5の人類集団オロクン、オロルン～ミャンマー少数民族、シベリア少数民族、東アジア人の出現

約45万年前、南アフリカが人口過剰の状態に陥ると「オロクン」と「オロルン」は、カアングとジェンギに別れを告げて古代ナイジェリアに移住した。しかし、しばらくして冒険心を刺激されたカアングとジェンギがナイジェリアを訪れると、家族である両者は、意気投合してアフリカを旅立った。アフリカ大陸を離れて、アラビア・インドを通過した彼らは、やはり、他の人類と同様に現チッタゴンに入植した。ミャンマー少数民族のような顔をしたオロクンはミャンマーに「アラカン族」を残し、オロルンはインドネシアに「アロール族」を残している。

オロクン、オロルンはカアングが築いた盤古に入植し、他のオリジナル人類アブク、ムワリ、チュクウ、クウォス、レザ、ムシシ、エスと混合し、獣人の部族「ギガース」を結成した。神統記に記されている12の獣人部族「アグリオス」「アルキュオネウス」「エウリュトス」「エピアルテース」「エンケラドス」「グラティオン」「クリュテイオス」「パッラース」「ヒッポリュトス」「ポリュポーター」「ポルピュリオン」「ミマース」が生まれた。

## ■第6の人類集団ジュオク、イマナ～金髪・碧眼・白人、ベトナム少数民族の出現

約30万年前、次世代の人類が大挙してアフリカの地に登場した。メラネシア人の顔をし、湖水地方に暮らしていた「ジュオク」。ミャンマー人の顔をし、同じく湖水地方（ルワンダ）に暮らしていた「イマナ」である。彼らは、他の人類と共にオリジナル人類の連合体「オケアーニス」を結成した。この集団は、2手に分かれて東南アジア、ヨーロッパに向かった。当時の北極圏であったヨーロッパに移住した褐色の肌をした集団は、だが弱い紫外線によってメラニン色素が生成されなかったため、金髪・碧眼を持つ白人と化した。

ジュオクは「河川の娘たち」を率いてヨーロッパに旅立ち、金髪・碧眼の白人と化して「エーゲ」の語源となった。ジュオク＝ジュオーゲ＝エーゲとなる。だが、東南アジアに移住したイマナは、ミャンマーに「マノー族」を残し、オロクンらと共にミャンマー人など、東南アジア人の祖を形成した。



## ■第7の人類集団エバシ、ウェネ、ニヤメ～アパッチ族、アイヌ族、台湾原住民の出現

約30万年前、次世代の人類が大挙してアフリカの地に登場した。アパッチ族の顔をし、現カメルーンの海岸に暮らしていた「エバシ」。アイヌ族の顔をし、ニジェール流域（ブルキナファソ）に暮らしていた「ウェネ」。台湾原住民の顔をし、現ガボンの海岸に暮らしていた「ニヤメ」である。彼らは、他の異なる人類ジュオクラと共にオリジナル人類の連合体「オケアーニス」を結成した。この集団は、2手に分かれて東南アジア、ヨーロッパに向かった。当時の北極圏であったヨーロッパに移住した褐色の肌をした集団は、だが弱い紫外線によってメラニン色素が生成されなかったため、金髪・碧眼を持つ白人と化した。

一方、「大洋の娘たち」を結成したエバシ、ウェネ、ニヤメらは東南アジアに向かった。彼らは、東方に3つの拠点を得た。エバシはインドネシアに移住して「ヴェシ族」を、ウェネは北海道に移住して「アイヌ族」を、ニヤメは台湾に移住して「アミ族」となり、台湾原住民の母体を形成した。

## ■第8の人類集団トレ、ヴィディエ～ドラヴィダ族、ヴェッダ族の出現

約30万年前、次世代の人類が大挙してアフリカの地に登場した。ドラヴィダ族の顔をし、現コンゴの海岸に暮らしていた「トレ」。ヴェッダ族の顔をし、同じく現コンゴの海岸に暮らしていた「ヴィディエ」である。彼らは、他の異なる人類ジュオクラと共にオリジナル人類の連合体「オケアーニス」を結成した。この集団は、2手に分かれて東南アジア、ヨーロッパに向かった。当時の北極圏であったヨーロッパに移住した褐色の肌をした集団は、だが弱い紫外線によってメラニン色素が生成されなかったため、金髪・碧眼を持つ白人と化した。

一方、「大洋の娘たち」を結成したトレ、ヴィディエらは東南アジアに向かった。彼らは、東方に2つの拠点を得た。トレはヴィディエと組んでインド南部に「ドラヴィダ族」を生んだが、ヴィディエは単独でスリランカに渡り、「ヴェッダ族」を残している。

## ■第9の人類集団キャラ、ルワ、アシェラーフ～ソマリア人の出現

約30万年前、次世代の人類が大挙してアフリカの地に登場した。パプア人の顔をし、現タンザニアの海岸に暮らしていた「キャラ」。ミャンマー人の顔をし、同じく現タンザニアの海岸に暮らしていた「ルワ」。ソマリア人の顔をし、ソマリアの海岸に暮らしていた「アシェラーフ」である。彼らは、他の異なる人類ジュオクラと共にオリジナル人類の連合体「オケアーニス」を結成した。この集団は、2手に分かれて東南アジア、ヨーロッパに向かった。当時の北極圏であっ

たヨーロッパに移住した褐色の肌をした集団は、だが弱い紫外線によってメラニン色素が生成されなかったため、金髪・碧眼を持つ白人と化した。

一方、「大洋の娘たち」を結成したキャラ、ルワ、アシェラーフらは東南アジアに向かった。彼らは、東方に3つの拠点を得た。ソマリア人の顔をしたアシェラーフはアイヌ族の顔をしたウエネと組んで古代イランに「ズルヴァーン」を祀り、イラン人の祖となった。一方、ルワはミャンマーに移住して「ライ族」を残し、キャラはニューギニアに「カウレ族」「セイル族」を残している。

## ■第10の人類集団ジョク、スク～獣人イエレン、獣人アルマスの出現

チュクウの後裔である「ジョク」「スク」は、全身を毛で覆われ、2m～3mの巨体を誇り、獣人然とした姿をしていた。彼らの顔は、眉毛がつながっている特徴を持つ、一部の中央アジア人に良く似ていた。現アンゴラに暮らしていたスクは、湖水地方に暮らしていたジョクと共に「アフリカ人の大航海時代」に参加した。この大航海時代は、史上初のアウトリガーカヌーによる航海である。これは、じつに7万年ほど前の超古代の話である。

東南アジアとアフリカを自由自在に往来していたイマナの船団に参加した彼らは、アフリカを離れて東南アジアに足を踏み入れた。まず、台湾に入植した彼らは、現地人と混合して「サキザヤ族」を残している。後に、獣人の部族サキザヤは、台湾原住民に吸収された。そして、ジョク、スクの本来の姿は、未確認生物として知られるイエレン、アルマスに継承された。

## ■第11の人類集団ディンカ、マベエ、ザムビ、ムルング～シベリア人、ミャンマー人の出現

現タンザニアに暮らしていたムルングは、湖水地方に集まっていた異なる人類の集団に参加した。この新しい人類による集団は、現カメルーンから来た「マベエ」、現中央アフリカから来た「ザムビ」、ナイル流域に暮らしていた「ディンカ族」で構成されていた。彼らは、ジョク、スクと同様に「アフリカ人の大航海時代」に参加した。

東南アジアに到着すると、ミャンマー人の顔をしたムルングは現チッタゴンに「ムルン族」を残し、ミャンマー人の顔をしたマベエはミャンマーに「モブワ族」を残している。一方、カンボジア人の顔をしたザムビは、カンボジアに入植して「チャム族」を残し、頭部が小さく、手足、指が長い黒人の姿をしたディンカは、インドネシアに「ドンゴ族」を残した。

## ■力と知恵の象徴スフィンクス アダム、カイン、アベル、セツの王国

「アルゴス号の大航海時代」によって世界一周を終えた獣人たちは、地中海に入ると、エジプト

に入植した。獣人の英雄ヘラクレスはこの地に「太陽神ホルス」を祀り、アドメテーは「蛇神アトゥム」を祀った。両者は、協力して知と力の象徴である「スフィンクス」を建設した。コブラの頭を持つ人物は、蛇神アトゥムを祀る知の象徴アドメテーを意味し、獅子の身体は、獣人の子孫であり力の象徴ヘラクレスを意味している。およそ7万年前の出来事である。

また、この地に「カイン」「アベル」が生まれた。獣人アルキュオネウスはカインを、獣人エピアルテースはアベルを生んだ。「アダム」はアドメテーのことだが、「セツ」の正体は、後に、スーサを経て台湾からやってきた素戔鳴尊である。

## ■バントゥー族のアフリカ大移住 ピグミーの顔を持ち、獣人の卓越した身体能力を持つ新人類

カオス、獣人の部族がオーストラリアに移住するとき、ピュグマエイの系統に属するブカット族が彼らの集団に参加し、同行した。ブカット族は、獣人エウリュトスと連合すると、ヘカトンケイルに属する「コットス」を生んだ。コットスからは、愛嬌のあるピグミーの顔を持ち、獣人の巨体と身体能力を受け継いだ「バントゥー族」と、ピュグマエイの小さな身体と獣人の身体能力、体毛に覆われた身体を継承した「オラン・ペンデク」が生まれた。

バントゥー族の名は、後世の人類学者による呼称である。実際にはバントゥー族は、コットス族と呼ばれるべきだろう。バントゥー族はオーストラリアで生まれ、ティタノマキアでゼウスに敗北したのを機にアフリカ全土に入植した人々である。バントゥー族は、全アフリカ地域に拡散し、アフリカ大陸の覇者となった。彼らからは、ピグミーの音楽センス、リズム感を受け継いだミュージシャン、獣人の比類なき身体能力を受け継いだアスリート、格闘家などが多く輩出されている。一方、ティタノマキアのあと、オラン・ペンデクは東南アジアに帰還し、現在では未確認生物、小型獣人としてスマトラ島などで現地人に目撃されている。彼らはコットスである。

## ■ヴォドゥン王国 テングリとピグミーが築いた国

ナミブ砂漠、カラハリ砂漠には、モンゴルの天空神として知られるテングリの国家が存在した。同盟者のチュクチ族が瀬戸内海に移住すると、丁零（テングリ）はシベリアを北上し、北極に向かった。3万年前の話である。ブリテン島北部が凍土で覆われているピクトランドに到達すると、テングリはピクト人と意気投合した。両者は、ブリテン島を離れて南下し、アフリカ大陸南部に上陸し、現ナミビア～カラハリに入植した。ピクト人は「ボグドー」を称した。

しかし、BC32世紀以前に、ソドム国、テーバイ王国を経由してこの地にもタナトスがやってくると、タナトスは下層民を信者として獲得し、数で圧倒する形でヴォドゥン王国の優れた王族を退けた。当時、テーバイ王国、ソドム、ゴモラでも同じことが起きていた。だが、生活の保障を求めて進んで悪に従う人々を見た科学の種族は激怒し、すべての国家を核兵器で焼き尽くした。これにより、消滅したヴォドゥン王国はカラハリ砂漠と化した。その後、南アフリカを離れた

テングリは、北欧を經由してシベリア沿いにモンゴルに帰還し、丁零（ディングリング）を復活させた。

## ■第12の人類集団マサイ、シルック～インド人、中央アジア人の出現

1万3千年前の大地殻変動の時代に生まれた、比較的新しい人類であるマサイとシルックは、揃って湖水地方～ナイル流域に暮らしていた。彼らは、地殻変動を気に、神々の集団アヌンナキで賑わっていたメソポタミアに移住した。頭部が小さく、手足、指が長い黒人の姿をした彼らは、現地人と混合して「メシェク」「セレグ」を生んでいる。頭部が小さく、手足、指が長い彼らは、世界中を冒険し、身長が高いシベリア人、頭部が小さく、手足が長いインド人・白人の身体に、その足跡を残している。

## ■エロヒム 黒い肌の神の出現

1万3千年前に大地殻変動が起きると、栄光の南極の種族は3つの船団に分かれ、完全に凍りついた故郷を後にした。「エノスの大航海時代」に参加した人々は、大西洋を横断して西アフリカに上陸した。西アフリカで連合したエロスとハムは、この地に「エロヒム」「アムル」を儲けた。2つの名に隔てられた彼らは、しかし不可分の存在である。彼らは、頭部が小さく、手足、指が長い黒人（セネガル人）と混合した。つまり、ユダヤ教、キリスト教で祀られ、白い肌を持つ神と考えられているエロヒムは、じつは褐色の肌を持つ西アフリカで生まれた神だった。

## ■朱雀（ツークエ）大地殻変動の亡命者がナイジェリアに築いた国

大地殻変動の際、スーサに集った人類の一部は、新天地を求めて「伏羲と女禍の大航海時代」に参加し、キエフ、アルプス、黒龍江、ナイジェリアの4ヶ所に入植した。ナイジェリアに朱雀（ツークエ）を築いた人々には、ジェンギ、カアング、ピュグマエイなどの面々がいた。ツークエの名の由来はチュクウである。

## ■初代テーバイ王国 サハラを統治した科学の種族の伝説の国

メソポタミアに神々の集団アヌンナキが生まれると、タップ・オノスに住んでいた科学の種族トバルカインは、緑に溢れた土地古代サハラに入植し、カドモスを王族に指定して「テーバイ王国」を建設した。初代テーバイ王国の歴史は、神統記に一部が記されている。オイディプスの物語

がそれである。侵入したタナトスを皆殺しにするために、初代テーバイ王国が大量の核兵器で消滅すると、中枢はインダス流域に移転された。

### ■ソドムの国 リビア、チャド、スーダンを統治した古代国家

「バベルの塔」の事件を機に、アルパクシャデはアフリカに移住し、現チャド、スーダンを統治下に置いた。BC 5千年頃の話である。彼らがチャド、スーダンに建設したのが、伝説の「ソドム」である。ソドムの名の由来はアルパクシャデとピュグマエイの組み合わせである。アルパクシャデ+ピュグマエイ=シャデマエイ=ソドムとなる。アルパクシャデとピュグマエイの連合体はソドムだけでなく、「クマルビ」「ゴモラ」も設けている。ソドムとゴモラの名は、両国が深い歴史で結ばれた同盟国だった証だ。BC 32世紀、忌まわしいタナトスを皆殺しにするため、ソドムとゴモラは、テーバイ王国と共に科学の種族の核兵器によって消滅した。

### ■第13の人類集団イサック～カナン人の出現

BC 40世紀、ソマリアの海岸で水生人として暮らしていたイサックは、上陸して陸上生活にスイッチした。イサックは、エチオピア（アビシニア）にいたアガウェ族と共にメソポタミアに移住した。ここに「イサク」「ヤコブ」が誕生した。彼らは、そこから更にシュメール人と共にペルーに入植し、チムー王国の建設に参加した。しかし、科学の種族が、卑しいタナトスを皆殺しにするために、核兵器によってチムー王国を焦土と化すと、イサックら、チムー王国の住人、古（いにしえ）の太陽神ピラコチャなどの神々は、出羽の国に移住した。これが、イスラエル王国の物語の発端である。

### ■最新の人類集団ハダメ～アラビア人、タミール人の出現

BC 500年頃、ソマリアの海岸で水生人として暮らしていたハダメは、上陸して陸上生活にスイッチした。ハダメはエラム人と組んでアラビア南部にハドラマウト王国を建設している。この王国が滅ぶと、彼らはハドラミーを称してディアスポラを開始し、世界中に散った。インド南部、スリランカに移住したハダメとエラム人の連合体は「タミール人」と呼ばれた。その後、偏見が強いタナトスのせいで、アフリカ大陸は人類の歴史から忘れ去られてしまう。そして、アフリカがキリスト教徒（白人列強）の歴史に登場するのは、奴隷狩りが始まってからのことである。



## 第二章 東南アジア・メラネシアの超古代史

---

### 東南アジア・メラネシアの超古代史

#### ■人類第2の聖地チッタゴン

チッタゴンは、人類第2の故郷である。オリジナル人類であるモリモ、ムワリ、アブクのあと、チュクウ、クウォス、エス、レザ、ムシシ、オロクン、オロルン、カアング、ジェンギなどが立て続けにやってきた。彼らが、永い時を経て混合を続けたため、多種多様な顔を持つ「東南アジア人」が生まれた。その後も、イマナ、マベエなどがチッタゴンに隣接する現ミャンマーに入植している。ミャンマーは全アジア人の故郷だといえることができるが、チッタゴンの名の由来は不明である。

#### ■アマゾン 台湾～福建にかけて築かれた南シナ海を統治した国家

東南アジア・メラネシア地域に到来したニヤメは、東北地方・北アメリカ・マヤ・台湾を治めていたバブサ族（アプスー）と連合して「アマゾン」を築いた。アマゾンの名の由来はニヤメとアプスーの組み合わせである。ニヤメ＋アプスー＝ヤメスー＝ヤマスーン＝アマゾンとなる。30万年前の、超古代のできごとである。

アマゾンに棲んでいたアマゾネスは、胸がない女性だとされている。だが、これはゲイ男性の象徴である。彼らの子孫といえる福建海賊も、ゲイは多かったようだ。因みに、福建で祀られている航海の女神「馬姐（マソ）」の名の由来はアマゾンである。超古代、南シナ海はアマゾンと呼ばれていたのだ。アミ族の姿をしたニヤメとアパッチ族の姿をしたアプスーは混合して台湾原住民の姿を生んだ。アルゴス号が到来した際、台湾原住民らは獣人ヘラクレスと戦った。

#### ■エチオピア王国 マレー半島～メラネシアを統治した伝説の国

ピグミー族の姿をした小人族ピュグマエイ（パグ族、ムユ族）は、大洋の娘たちに属するヴェツダ族の顔をしたエウドーラー、ソマリア人の姿をしたエウローペーと共に「エチオピア王国」を築いた。エウドーラー＋エウローペー＝エウドーペー＝エウドオペア＝エチオピアとなる。現在のエチオピアは、超古代のエチオピア王国の名を継承したものである。

ピグミーの姿をしたピュグマエイとソマリア人の姿をしたエウドーラーが混合すると、「ブガット族」「ペカタン族」が生まれた。彼らは、神統記では「ヘカテ」、トロイア戦争では「ヘクトル」と呼ばれたが、「ピクト人」と不可分の存在である。ピュグマエイ＋エウドーラー＝ピュ

グドーラー＝ヘクトル・ヘカテ・ピクト＝ブカット・ペカタンとなる。

## ■アウトリガーカヌーの発明 人類の大冒険時代の予感

ミャンマーのマノー族（イマナ）、台湾のアミ族（ニャメ）の2種族は、現在でもポリネシア人が使用している「アウトリガーカヌー」の原型を発明し、船で東南アジアと故地アフリカを往来していた。この時に、インド洋を横断してマダガスカルに至る航路が発見された。台湾原住民の姿をしたニャメ、ミャンマー人の姿をしたイマナは、アフリカを「黄泉の国」と呼んでいた。黄泉の名はニャメの名に因んでいる。つまり、具体的には、黄泉の国はニャメの出身地、現ガボン地域を指している。古代人は、常人が活着ている間にたどり着けないような遠方の土地を冥府と呼んだのだ。

彼らは、アフリカの地で獣人の姿をしたジョク、スク、ミャンマー人の姿をしたマベエ、ムルング、カンボジア人の姿をしたザムビ、頭部が小さく、手足、指が長いアフリカ人の姿をしたディンカ族を迎え、東南アジアに招待した。彼らは、そのままミャンマーや台湾に上陸し、東南アジアに暮らすオケアーニスたちも迎えて台湾に「高天原」を築いた。7万年ほど前の、超古代の話である。

## ■高天原 天照大神が統治した台湾の国際都市

ミャンマー人の顔をしたマノー族（イマナ）は、金髪・碧眼・白人の姿をしたティケーと共に台湾に古事記に登場する古代国家「高天原（たかまのはら）」を築いた。ティケー＋イマナ＋原＝ティケマナ原＝たかまの原＝高天原となる。高天原には、獣人、オケアーニスなどが集い、国際色豊かな国家として繁栄した。高天原は、東南アジアのエチオピア王国、福建のアマゾン、九州の葦原中津国、日本海の家宮国、東北の蝦夷（えびす）、北海道のアイヌ族とも交流を持った。

天照大神、素戔鳴尊を筆頭に、古事記に登場する八百万の神々が古代台湾の地に生まれた。天照大神の名はニャメとドーリスの組み合わせであり、素戔鳴尊の名はペルセウスとウラニアの組み合わせである。ニャメ＋ドーリス＋大神＝ヤメトリス大神＝天照大神となり、ペルセウス＋ウラニア＝セウスニア＝セスヌオー＝素戔鳴尊となる。

## ■太陽神ミトラの国 ボルネオを統べたミツライムの国

「第2次北極海ルート」に参加したミツライムは、シベリア海を抜けてアジアを南下するとボルネオ島に入植した。彼らはこの地に「太陽神ミトラ」を祀り、「マドゥラ王国」を建設した。ミ



トラ、マドゥラの名はミツライムに由来している。その後、ボルネオのマドゥラ王国が滅ぶと、ミツライムはチベット、モンゴルから焼け出された亡命者が集う古代イランに移住し、ヤザダ神群に参加している。その後、歴史の表舞台から姿を消した東南アジアだが、白人列強時代に植民地として歴史に再登場をしている。タナトス教の完全服従に抵抗した彼らは、近年になって、身体の奥に眠っていた先祖の記憶を呼び覚まし、古（いにしえ）のエティオピア王国を再現するかの勢いで、繁栄を手中にしている。

## 第三章 中国・シベリア・蒙古の超古代史

---

### 中国・シベリア・蒙古の超古代史

#### ■盤古（パングア） 巨人の大地

コイサン族の顔をしたカアングは、チッタゴンに「パンコー族」を残している。パンコーの名の由来は、カアングである。カアング=カアンゴ=ワンゴ=パンコーとなる。一方、オロクンは「アラカン族」を、ジェンギは「シャン族」をミャンマーに残している。また、オロルンは、「アロール族」をインドネシアの地に残している。

オロクンたちの訪問を機に、チッタゴンに集っていた異なる人類は、共同で獣人をベースにしたオリジナル人類の連合体を築いた。この時に、神統記に記された12の獣人部族「アグリオス」「アルキュオネウス」「エウリュトス」「エピアルテース」「エンケラドス」「グラティオン」「クリュティオス」「パッラース」「ヒッポリュトス」「ポリュポーターズ」「ポルピュリオン」「ミマース」が生まれた。この獣人の集団は、チッタゴンを出ると古代中国に移住し、現地を「盤古（パングア）」と呼んだ。パングアの名の由来はパンコーである。

#### ■巨大哺乳類の絶滅 マンモスを狩る獣人の集団

当時のシベリアは現在よりも、南方に位置していた。マンモスなどの大型哺乳類も闊歩していた。身長が2m～3mを超す獣人らは、狩猟民としてマンモス狩りを行った。シベリアで暴れていた彼らは、アメリカの未確認生物ビッグフットと何ら変わらない姿をしていたと考えられる。その後、獣人の群れは、他の獲物を追い、シベリアから北アメリカに渡った。

#### ■遊牧のはじまり アメリカから来た原初の神カオス

当時の北アメリカには、アルカオテリウム（猪の祖）、ウィンタテリウム（サイに似ていた）、ブロントテリウム（サイの祖）、メソヒップス（馬の祖）、アルティカメルス（ラクダの祖）、モロプス（大きな馬くらいの大さき）、ジャイアントパイソン、メガテリウム（なまけものの祖）などの巨大装飾哺乳類が存在していた。獣人は、その比類なき身体能力でスミロドン（サーベルタイガー）などの大型肉食動物と戦いながら、これらの巨大哺乳類を狩った。一方、乱獲によって大型哺乳類が絶滅すると、古代人類の中でも知性に秀でたクウォスはアルカオテリウム（猪の祖）、メソヒップス（馬の祖）、アルティカメルス（らくだの祖）を飼いならして家畜化し、現在知られている豚、馬、らくだを生んだ。

エバシのアメリカ大陸訪問を機に、争いを好まない獣人ギガースの集団は、家畜化した豚、馬、らくだを携えて、アメリカ大陸からモンゴルに帰還した。この時に、東アジアに馬やらくだがもたらされ、モンゴルから中央アジアに広がっていった。この時、クウォスは、獣人アルキョオネウス、獣人ブリアレオースと連合して神統記に記された「原初の神々」の種族を生んだ。「カオス」「ガイア」「エロス」である。家畜をモンゴルに持ち込んだ彼らは、人類初の遊牧民として暮らした。また、狼を飼いならして「犬（ディンゴ）」を生んだ。

遊牧により、定期的に栄養価の高い食事を摂るようになった事で、カオスらは急速に知能を発達させる機会を得た。ここで、現代人でさえ、なかなか理解できない彼らの「知恵」について触れてみたい。遊牧民であった彼らは、時折、家畜による反乱に悩まされていた。しかし、カオスは、ここで、反乱が起きてから対処するのではなく、反乱を事前に防止する、という発想を得るに至る。つまり、リーダー格になる素質を持つ個体を幼い内に見極め、間引くことで、集団で暴れると手が付けられない大型哺乳類の反乱を防止し、凶暴な狼を人間の友たらしめた。これが真に「知る」ということである。

#### ■黄色人種の誕生秘話 シベリアを統べる至高神ウリゲン

盤古たちが移ったシベリアに関心を示したオロクン、オロルンらは、チッタゴンを離れてシベリアに移住した。バングラデシュ人の姿をしたオロクンの到来を機に、争いを嫌う獣人たちは自ら退き、故地を捨ててオーストラリア大陸に移った。だが、オロクンらはカオスらが残した遊牧生活を継承せず、到着先で改めて海に入った。そのため、彼らは主流派の現生人類とは異なる身体的な特徴を得るに至った。シベリア人・東アジア人（モンゴロイド）の誕生である。

彼らは、オホーツクで海女のような生活をしていたと考えられるが、彼らの身体は、寒流がもたらす冷たい海水に対抗するため、大きな変化が加えられた。冷水から目を守るためにまぶたは厚く、目は細くなった。凍傷を防ぐために突起部分は削られて、顔は平坦になり、手足、指も他の人類に比べて短くなった。これが、他の人類とは似ても似つかない顔と身体的特徴を持つ、シベリア人・東アジア人（モンゴロイド）の誕生秘話である。その後、オロクンは「ウリゲン」、オロルンは「エルリク」と呼ばれ、現在でも至高神としてモンゴルで崇められている。

#### ■犬戎（キロン） 冥府の河ステュクスとカロンの渡し守が支配する国

オーストラリアに生まれた「ステュクス」は、金髪・碧眼・白人の姿をしたジュオク、獣人の姿をしたチュクウ、アボリジニの姿をしたクウォスの、3種のオリジナル人類による連合体である。ジュオク+チュクウ+クウォス=ジュチュクォス=シュテュクォス=ステュクスとなる。その後、反自然の種族の台頭を嫌ったステュクスは、オーストラリアを離れて台湾に移住し、「セデック族」を生んでいる。セデックの名の由来はステュクスである。ステュクス=セデュクス

=セデックとなる。

一方、7万年前に「アフリカ人の大航海時代」によってディンカ、ムルングが東南アジアを訪れた。ディンカがインドネシアに「ドンゴ族」を、ムルングがチッタゴンに「ムルン族」を生むと、ムルン族とドンゴ族は合体し、ミャンマーに「カレン族」を誕生させている。カレンの名の由来はディンカとムルングの組み合わせである。ディンカ+ムルング=ディンカルング=ディンカレング=カレンとなる。

カレン族は、台湾にいたセデック族と意気投合し、交流を重ねた。その後、セデック族とカレン族は、東南アジアを離れ、北上して黒龍江に移っている。セデック族は「チュクチ族」となり、カレン族は「丁零（ディングリング）」となった。チュクチの名の由来はステュクスであり、丁零（ディングリング）の名の由来はディンカとムルングの組み合わせである。神統記では、チュクチ族が守っていた黒龍江が「冥府の河ステュクス」と呼ばれ、丁零が「カロンの渡し守」と呼ばれた。頭部が小さく、手足が長い褐色の肌をした丁零（ディングリング）は、「犬戎（キロン）」または「天空の神テングリ」とも呼ばれた。古代人は、常人が活着ているうちに辿り着けないような遠方の地を「冥界」と呼んだ。

#### ■神武天皇の国 大地殻変動後の黒龍江を統治した獣人の王族

大規模な地殻変動が起きると、若御毛沼がメコン流域に築いた国から日本に向かって船出した。これが「神武東征」である。一行は、壊滅した日本を迂回し、黒龍江に入植すると、獣人エウリュトスは日本から逃れてきていたティアマトと連合して「ヤマトイワレヒコ」を生んだ。ヤマトイワレヒコの名の由来はティアマトとエウリュトスの組み合わせである。ティアマト+エウリュトス+彦=アマトエウリュ彦=ヤマトイワレヒコとなる。

ヤマトイワレヒコは、ディオナーネーとオアンネスが築いた「天皇（ティエンホアン）」に参加し、神武天皇を称して黒龍江流域の王として即位し、犬戎（キロン）、山戎（シャンロン）と呼ばれていた黒龍江流域、モンゴルを支配していた獣人アルキュオネウスの国クンエ（くんいく）、キアンユン（けんいん）を統率した。神武天皇以下、綏靖天皇、安寧天皇、イ徳天皇、孝昭天皇、孝安天皇、孝霊天皇、孝元天皇、開化天皇、崇神天皇、垂仁天皇も、みな獣人とオケアーニスの連合体から生まれている。

#### ■北斗星君 北京に建設されたメラネシア人の古代国家

大地殻変動が起きると、ヴェツダ族の姿をしたオケアーニスに属するペイトーは、東南アジアから現北京あたりに入植した。ペイトーは、カアング、ジェンギと共に「北斗星君（ペイトーキンジュン）」を、現北京付近に築いた。カシオペア、アンドロメダなどの王族を生んだエティオペア王国の影響を受け、ペイトーは北斗七星に因んで北斗星君を築いた。

## ■青龍（チンロング） シベリア、東南アジアの亡命者たちが築いた国

「伏羲と女の大航海時代」に参加して、宿神（スシェン）から来た獣人たちは、丁零（ディングリング）たちと組んで黒龍江流域に「青龍（チンロング）」を築いた。カシオペア、アンドロメダなどを生んだエティオピア王国の影響を受け、青龍は星座に因んだ7つの部族を生んでいる。

## ■六十元辰 長江流域に築かれた国際都市

大地殻変動の際、凍結したシベリアから命からがら長江流域に逃げてきた丁零は、同じく、メラネシアから逃げてきたオケアーニスたちと連合して60もの神々を長江に生んだ。「六十元辰」と呼ばれた彼らは「元辰（ユエンチェン）」を築いた。元辰（ユエンチェン）、長江（チャングジャング）の名の由来は丁零（ディングリング）とジェンギの組み合わせである。

## ■北狄（ベイディ） 南極からの亡命者ヤペテが建てた国家

大地殻変動の際、「エノクの大航海時代」に参加したヤペテは、北アメリカに後進を残しながら、本体はモンゴルに移住した。ヤペテは、黒龍江に天皇家を起こす人々に先んじて、古代モンゴルに「北狄（ベイディ）」を生んだ。ベイディの名の由来はヤペテである。ヤペテ＝ヤベイディ＝ベイディ（北狄）となる。

## ■澳門（マカオ） 南極からの亡命者レメクが建てた国家

大地殻変動の際、「エノクの大航海時代」に参加したレメクは、広東地方に入植した。レメクは澳門（マカオ）を建設した。マカオの名の由来はレメクである。レメク＝レメカオ＝マカオとなる。その後、レメクはメソポタミアに移り、「ラムガ神」を生んだ。ラムガ神は、亡命者で集う「神々の集団アヌナキ」に参加している。

しかし、4柱の神々アン、エンリル、ウトゥ、エンキと仲違いが起き、ラムガ神が殺されると、レメクの残党は、メソポタミアを離れてアラビア半島に入植し、ラーマ皇子を生んだ「マガン王国（ミケーネ）」を建てた。マガンの名の由来はメコンと同じくレメクとエノクの組み合わせである。レメク＋エノク＝メクエノ＝メコン＝マガンとなる。

## ■神農と夏 カナンが古代中原に築いた伝説の国

「第1次北極海ルート」でレナ河流域に入植し、その後にモンゴルに移住して「月氏」と呼ばれたカナンは中国に伝説の王朝「夏（キア）」を建設した。彼らが「月氏」と呼ばれたのは、カナンのメソポタミアで「月の神ナンナ」を祀っていたためだ。武蔵国を発ったモーゼスが目指したカナンとは、夏王朝が統治していた時代の中国のことである。

## ■道教 ユダヤ人の中国上陸

シュメール人と共に、ペルーから出羽国に入植したピラコチャは、伊勢国のイデュイア（ユダヤ人）を連れて中国に移住した。伊勢国から古代中国に移住したイデュイアは、長江流域に入植し「道教（タオ）」を創始した。タオの名の由来はイデュイアである。イデュイア＝イテユイア＝イテア＝タオとなる。中国の道教、日本の神道、イスラエルのユダヤ教は、名前が違うだけで不可分である。一方、ピラコチャはイスラエルの士師「バラク」と呼ばれた。バラクの名の由来はピラコチャである。

## ■古代中原の地に立つイスラエルの士師たち 縄文人が中国に移住

モーゼスが渡った「葦の海」は、実際には日本海のことである。イスラエル語で「葦」は「R I D」である。つまり、葦の海とは「R I Dの海」のことであるが、R I Dは、ブリヤート族のことを指している。当時、満州・朝鮮半島周辺を支配していた「ブリヤート族の海」とは日本海のことには他ならない。イスラエル12支族（レビ族を含めると13支族）も、全部族が中国の地で生まれている。

## ■パプア人の首長 サウル王、ソロモン王のモンゴル統治

モーゼスの大移動を機に、チムー王国のカウレ族（ガラクサウラー）とモニ族（メネストー）は、東北地方を離れてモンゴルに植民地を構える。ここに「統一イスラエル王国」が誕生した。サウル朝、ソロモン朝はパプア人が支配したモンゴルの話であり、ダヴィデ朝は十和田人が支配したチベットの話である。つまり、統一イスラエル王国と南北分裂時代のイスラエルとは、数千年に及ぶ時の隔たりがあると心得たい。

サウルの名の由来はガラクサウラーであり、ソロモンの名の由来はガラクサウラーとメネストーの組み合わせである。ガラクサウラー＋メネストー＝サウラメネ＝ソロモンとなる。「モンゴル」の名の由来もソロモンと同じく、ガラクサウラーとメネストーの組み合わせである。メネスト

一十ガラクサウラー＝メネガラ＝モンゴルとなる。彼らがヨーロッパに移ると、モンゴルの名を反対にし、ドイツ地域を「ゲルマニア」と呼んだ。

#### ■東北縄文人の首長 ダヴィデ王のチベット統治

モーゼスの大移動を機に、十和田の人々は、東北地方を離れてチベットに植民地を得ることになる。ここに「統一イスラエル王国」が誕生した。サウル朝、ソロモン朝はパプア人が支配したモンゴルの話であり、ダヴィデ朝は十和田人が支配したチベットの話である。つまり、統一イスラエル王国と南北分裂時代のイスラエルとは、数千年に及ぶ時の隔たりがあると心得たい。ダヴィデ、チベットの名の由来は十和田であるが、十和田の名の由来はトバルカインとヴィディエ（プテ）の組み合わせである。十和田＝ドヴァダ＝ダヴィデとなり、十和田＝ドヴァダ＝ドヴァッタ＝チベットとなる。

#### ■アジアを駆けるヨシュアの進軍～南北分裂時代のイスラエル王国

チベットとモンゴルの植民地が、タナトスを憎む科学の種族トバルカインの核攻撃で滅ぶと、アシアーはチベットからパンジャブのシバの王国に帰還した。その後、シバの王国は西方に向けて大遠征を実施した。この時、アシアーは「ヨシュア」と呼ばれた。アシアー＝ヤシアー＝ヨシュアとなる。

聖書では、ヨシュアはヨルダン川を越えてエリコに侵攻したが、実際にはインダス河を越えてウルクに侵攻した。この時にアブラハムを従えたヨシュアはヨーロッパに到着すると、今度は「アーサー王」と呼ばれた。ブリテン島とヨーロッパを掌握したヨシュアはエジプトに向かい、途上のカナンにアブラハムとヨセフを残している。ヨセフは一部のアシアーのことである。ヨシュアはエジプトに到着すると、アシアーを生んだ先祖アシェラーフが祀ったオシリスを継承した。伝説の王朝「夏」時代の中国では、「聖書」に記されたことが起きていたわけだ。だが、「夏（カナン）」が終焉を迎えると、日本から、ナーガ族とシャン族の連合体「長脛彦（天狗）」がモンゴルにやってきて「東胡（トングー）」を建てる。その後、中国に足を踏み入れた彼らは「殷（イン）・商（シャン）」を築き、我々が知っている中国の歴史がここに始まることになる。

## 第四章 アメリカの超古代史

### アメリカの超古代史

#### ■巨大哺乳類の絶滅 サーベルタイガーと戦う獣人の集団

当時の北アメリカは現在よりも、北方に位置しており、北極圏に含まれていた。大地殻変動以前の北極点はグリーンランドにあったため、北アメリカ北部は永久凍土に覆われていた（氷河期は無かった）。獣人の集団は、新たな獲物を追ってシベリアを離れ、人類初のアメリカ大陸上陸を果たした。現在知られているインディアンの中には、彼ら獣人の狩人の名前を継承している部族が未だに存在している。

キルーテ族（クリュティオス）、ベラベラ族（ポルピュリオン）、イヤー族（エピアルテース）、ハイダ族（ポリュポータース）、カウイア族（アルキュオネウス）、フーパ族（ヒッポリュトス）、イパイ族（ポリュポータース）、ビーヴァー族（ヒッポリュトス）、クリー族（グラティオン）、キャリアー族（アグリオス）、キユース族（クウォス）、パルース族（パッラース）、ニコラ族（エンケラドス）、シャイアン族（グラティオン）、エリー族（エウリュトス）、ヒューロン族（ポリュピュリオン）、ソーク族（チュクウ）、アイス族（ミマース）、アパラチー族（エピアルテース）である。

未確認生物としてネッシーと人気を二分するビッグフットは、この時にアメリカに移住した獣人の子孫だと考えられる。上記のギガースらの名、或いはインディアン部族時代の名を呼べば、彼らが反応する可能性も高い。なぜなら、彼らは、先祖の名を非常に重んじるからだ。更に、ビッグフットのことを知れば、当時の獣人たちの様子を知ることができるだろう。

ビッグフットを目撃談によると、彼らはアジアの言葉に似た独自の言語を持ち、自分たちで森の中にこしらえた円形の闘技場で拳闘に興じるという。ビッグフットと親しくなった林業従事者は「ずいぶんサスカッチに大声をかけられたり口笛やヨーデルも吹かれた。わけのわからない言葉で怒鳴られたり、ぼーっと突っ立っていると小突かれたこともある。どうもおれが他の猛獣に襲われないように見張ってくれてたみたいだ」と証言している。素手で猛獣を殺すこともできる彼らだが、一方では文化的な側面を併せ持っていることがわかる。

#### ■アパッチ族 獣人に次ぐ、人類のアメリカ上陸第2団

その後に日本を発ち、アメリカ大陸に無事到着したエバシだが、彼らは、水生人として海岸伝いに泳ぎながら永い時間をかけ、移動を実施した。カナダ～カリフォルニアにかけて根付いた彼らは、当時の北極圏であった北アメリカの海岸を洗う寒流により、髭が生えない体質に変化した。この時から、南北のアメリカ・インディアンには髭が生えていない。また、彼らは数万年も



の間、水生生活を送っていたため、アメリカでは、3万年以上前の人類の痕跡は発見されていない。

#### ■太陽の王国ピラコチャ 蛭子神が統治した古代ペルーの国

ジェンギは、獣人アグリオスと連合して「サンガリオス（シャンカレー族）」を生んだ。ジェンギ+アグリオス=ジェングリオス=サンガリオスとなる。サンガリオスは、大群を率いてアメリカ大陸を目指した。しかし、北アメリカ、ユカタン半島には先発隊のエバシ（アパッチ族）がいたため、彼らは人跡未踏の南アメリカ・ペルーに入植した。この大移動時代により、ピラコチャなどペルーの神々が生まれた。ピラコチャの名の由来はプレークサウラーである。プレークサウラー=プレクサ=ピラコチャとなる。太陽神ピラコチャは、「蛭子神（ヒルコ）」の前身でもある。

#### ■常世の国 ユタに築かれたステュクスとエウドーラーの国

北欧神話に登場するユグドラシルの正体は、巨木セコイアである。エウドーラーは、ステュクスと共に第二の「アルゴス豪の大航海時代」に参加し、東南アジアを出発点にした。一行は、アメリカ大陸にまで及んだ。当時、北極点がグリーンランド中心部に位置していたため、カナダは氷河に覆われていた。エウドーラーは、氷河がすぐそこまで迫っているポイントに入植し「ユタ」を築いた。ユタの名の由来はエウドーラーである。エウドーラー=エウトーラー=エウト=ユタとなる。

また、ユタは高天原の人々に「常世の国」と呼ばれた。トコヨの名の由来はステュクスとエウドーラーの組み合わせである。ステュクス+エウドーラー=テュクエウ=トコヨ=常世となる。また、彼らは巨木セコイアの森に感嘆したが、セコイアの巨木は「ユグドラシル」と呼ばれた。ユグドラシルの名の由来はステュクス、エウドーラー、ガラクサウラーの組み合わせである。

#### ■ミドガルド王国 巨木セコイアが林立する古代カリフォルニアの地に築かれた国

一方、アドメテーと獣人クリュテイオスは、現在のネバダ砂漠に「ミドガルド王国」を建設した。ミドガルドの名の由来はアドメテーとクリュテイオスの組み合わせである。アドメテー+クリュテイオス=メテクリュテ=ミドガルドとなる。彼らは、現カリフォルニア北部に林立する巨木セコイアを、永遠のとねりこ「ユグドラシル」と呼んだ。ユグドラシルの名の由来はステュクス、エウドーラー、ガラクサウラーの組み合わせである。ステュクス+エウドーラー+ガラクサウラー=ユクドローラーサウラ=ユグドラシルとなる。北欧神話の舞台は、北欧ではなく、多数の

異なる舞台を持っているが、ユグドラシルの舞台は間違いなくカリフォルニアである。

## ■ヴァルハラ王国 戦士の守護神ヴァルキューレが統治した古代メキシコの国

北欧神話に登場する巨人ユミルの正体は、獣人エピアルテースである。エピアルテース＝エミアルテース＝ユミルとなる。獣人の英雄ヘラクレスは、オケアーニスたちと共に古代ユカタン半島に上陸し、ミドガルドに隣接すエウ形でメキシコ北部に国家を建設した。この時に、獣人の顔をしたヘラクレスと金髪・碧眼の白人であるオケアーニスが混合してメキシコ人が生まれた。メキシコ人を巨大化し、全身に体毛を生やせばサスカッチになるのかもしれない。当地は「ヴァルハラ」と呼ばれ、ヘラクレスは「ヴァルキューレ」と呼ばれた。ヘラクレス＝ヴェラクレーレス＝ヴァルキューレとなる。メキシコに「ベラクルス」という土地があるが、名前から察するに、戦士の守護神ヴァルキューレの棲家だったのだろう。

## ■最終戦争ラグナロク 核兵器によって焼き尽くされた人喰い人種たち

現ネバダ砂漠にあったミドガルド王国は、常世の国ユタとメキシコ北部にあったヴァルハラ王国に隣接し、3ヶ国は交流を重ね、繁栄を極めた。この、アメリカ大陸に栄えた古代王国は、だが、悪竜ニドボグ（タナトス）の侵入によって崩壊への道を進んだ。タナトスは邪教によってミドガルド、ヴァルハラ、ユタの下層市民を信者として大量に獲得し、数で圧倒する形で優れた王族を退けた。

科学の種族トバルカインは、当時、古代マヤに住んでいたが、一部始終を余すところなく監視してきた彼らは、ついに激怒し、核兵器によってタナトスと、生活の保障を得るために進んで悪に従う信者たちを焼き尽くすことを決定した。そのため、栄光の古代王国は跡形も無く消滅し、ネバダ～メキシコ北部は荒涼たる砂漠と化した。しかし、第二次大戦後、ネバダ砂漠はアメリカ政府によって核実験場として使用されたが、それ以上に砂漠化は進むことが無かった。これは、ミドガルドを焼いた最終戦争ラグナロク当時、非常に大量の核兵器が投入されたことを意味する。科学の種族の、タナトスに対する嫌悪感が伝わってきます。

## ■ティル・ナ・ノーグ ティアワナクとも呼ばれた常世の国

ヨーロッパを経てペルーに入植したエノクらは、アンデスを越えてペルーからアマゾン流域に下ると、雨季になると広大な森林地帯が氾濫したアマゾン河の水底に沈むモホス平原を発見する。この神秘の平原に魅せられたエノク族は、モホス平原に定住を試みることで文明の発想を得た。文明の基幹産業である農業や魚の養殖に開眼すると共に、用水路、運河、排水設備建設の必要性

に気付いたのだ。それに伴って、土木・建築技術が向上し、計画的な都市建設が可能になった。アマゾン上流域に位置する彼らの国は、台湾の高天原、東南アジアのエティオピア王国とも交易を行っていたが、特にオーストラリア東部に位置するタルタロスの国テュロスと同盟関係にあったため、テュロスとエノクの名に因んで「ティル・ナ・ノーグ」と呼ばれた。その後、ティル・ナ・ノーグは「ティアワナク」、または、ヨーロッパ人に「ハイ・ブラジル」とも呼ばれている。

#### ■レメクの国 御毛沼が築いた首都リマック

クリュメネーとカイコス、ディオナーの連合体であるマカタオ族は、古事記では「御毛沼（みけぬ）」として知られている。彼らは、台湾を離れてインドネシアに立ち寄り、ダオ族（ディオナー）、カリス族（クリュセーイス）と共に、ペルーの国際都市ティル・ナ・ノーグに向かった。アリューシャン列島周航を採用した彼らは、入れ違いで、東アジアに向かう「エノクの大航海時代」の人々とすれ違う。この時、カリス族はエノスと連合して「アナサジ族」をコロラド流域に残した。その後、ペルーに入植したマカタオ族はペルーに「レメク」を生んだ。クリュメネー＋カイコス＝リュメカイ＝レメクとなる。レメクの名は首都リマの古名リマックとして残されている。

#### ■アナサジ族 オナシス財閥の先祖

東アジアに向かうべく「エノクの大航海時代」に参加したエノスは、途上のコロラド流域に入植し、「アナサジ族」を生んだ。アナサジの名の由来はエノスとクリュセーイスの組み合わせである。エノス＋クリュセーイス＝エノセーイス＝エノセス＝アナサジとなる。アナサジ族は、後に栄えるプエブロ族が繁栄する下地をコロラド流域に形成した。

アナサジ族は、BC 26世紀に地中海に移住し、クレタ島に上陸して「クノッソス」の名を残した。この時の移住者たちは、後の大富豪アリストテレス・オナシスを生んだ「オナシス家」の祖となった。オナシスの名の由来はアナサジである。アナサジ＝オナサシ＝オナシスとなる。

#### ■チムー王国 シュメール人がペルーに築いた国～シュメール文明誕生の地

シュメール人は、イサクらを率いてメソポタミアを後にし、途上のニューギニアでカウレ族（ガラクサウラー）、モニ族（メネストー）を大航海時代に迎えた。その際、じつは、人喰い人種のダニ族が同行していた。これにより、エセ宗教によって大量の出来損ないを統治し、数で圧倒する形で優れた王族を退けたダニ族は、人身御供やカニバリズムにより、チムー王国を崩壊に導

いた。シュメール（チムー王国）＝イスラエル（日本）＝カナン（中国）＝サウル朝、ソロモン朝（モンゴル）＝ダヴィデ朝（チベット）となる。つまり、現在の位置にイスラエルがあったとしても、聖書に書かれていること全てが現地で起きたことにはならない。異邦の地からやってきた旅人が、イスラエル王国の話現在のイスラエルで現地人に披露したに過ぎない。

## ■イスラエル王国の始まり ペルーに栄えた平和な王朝の終焉

人身御供、カニバリズムを持ち込んだ、卑しいダニ族を嫌ったチムー王国のシュメール人は、科学の種族デーヴァに頼んで核兵器でペルーを焼き払った。それが原因で、ナスカなどは砂漠と化している。シュメール人はこの全面核攻撃の前に大航海時代を企画し、正しい人々を連れてペルーを脱出するが、この大航海にもダニ族が忍び込んでいた。残念なことに、サバイバルを遂げたダニ族は、モンゴルで預言者「ナタン」となり、サウル王、ソロモン王を操り、ダヴィデ王と対立している。

その後、優れた人々が故地であるアメリカ大陸を大挙して離れると、無力な人々が南北アメリカに残された。しかし、彼らはタナトスに操られた白人列強に発見され、インディアンと呼ばれ、インカ帝国滅亡、スー族の大虐殺が起きるまでは、自分の意思で平和な暮らしを送ることができた。

## 第五章 アラビア・イランの超古代史

---

### アラビア・イランの超古代史

#### ■エデンの園 ヴェツダ族とアイヌ族の国

アフリカを離れたジュオク、ウェネ、エバシ、アシェラーフ、トレ、キャラ、ルワ、イマナ、ニヤメ、ヴィディエの一行は、紅海に入り、アラビア半島南部に拠点を築いた。ここに異なる人類の連合体「オケアーニス」が生まれた。オケアーニスの名の由来はジュオク、ウェネ、エバシの組み合わせである。ジュオク+ウェネ+エバシ=オクウェネシ=オケアーニスとなる。オケアーニスには「大洋の娘たち」と「河川の娘たち」がいたが、海岸に暮らしたエバシが「大洋の娘たち」を統率し、湖水地方に暮らしたジュオクが「河川の娘たち」を統率した。10の異なる人類から、65の新しい混血部族が誕生した。

紅海に棲んでいたペイトー（ピュトン）は、アラビア半島に上陸して「エデン」を築いた。その、エデンの園に住んでいた「アダム」の正体はアドメテーであり、「エヴァ」の正体はエウエノスである。つまり、ヴェツダ族の顔をしたペイトー、エウドーラー、アイヌ族の顔をしたエウエノスがアラビア人の顔を作り上げた。他のオケアーニスたちは、上陸せず、基本的に水生人として紅海沿岸に暮らしていた。

#### ■至高神ズルヴァーン イラン人の誕生

ソマリア人の顔をしたアシェラーフとアイヌ族の顔をしたウェネは連合し、古代イランに、至高神「ズルヴァーン」の統治による永遠なる平和の時代、光の楽園の時代を作った。ズルヴァーンの名の由来はアシェラーフ、ウェネの組み合わせである。アシェラーフ+ウェネ=シェラーフェネ=シェラフェーン=ズルヴァーンとなる。ソマリア人の顔をしたアシェラーフとアイヌ族の顔をしたウェネの合体により、イラン人の顔が生まれた。

#### ■超古代都市スーサ 素戔鳴尊がイランに築いた国

天照大神に高天原（台湾）を追放された素戔鳴尊は、芦原中津国に進出した。ただ、この「芦原中津国」は、アジアーに因んだアジア（アナトリア半島）とキレナイカ（グレニコス）を含む、もうひとつの芦原中津国（エーゲ海）を指している。その後、素戔鳴尊はエーゲ海からペルシア湾に移り、「スーサ（シュシャン）」を築いた。スーサの名の由来は素戔鳴尊である。獣人の英雄ペルセウス、高天原の素戔鳴尊、アダムの子セツ、古代ギリシアの全能神ゼウスは、名前こそ

違えど、不可分の存在である。

## ■宿神（スシェン） 「伏羲と女禍の大航海時代」の発信基地

「デウカリオンの大航海時代」の船団がメラネシアを訪れると、オケアーニス、獣人たちは彼らの船団に加わり、一旦、スーサに身を寄せた。だが、彼らはすぐに東西南北に分かれ、伏羲と女禍が指揮する船団に参加してスーサを旅立った。フッキ（伏羲）はヘカテ（ピクト人）のことであり、ヌア（女禍）はウラニアーのことである。この大航海時代からは、青龍、玄武、朱雀、白虎などの古代都市が生まれた。

## ■神々の集団アヌンナキ 大地殻変動後の最初の大規模な国家

大地殻変動を機に、世界各地から神々の血統がメソポタミアに集った。ブリテン島から来たテミス、ヘカテ。モンゴルから来た三皇、垂仁天皇、獣人たち、オケアーニスたち、エビス（アプスー）、ヤマト（ティアマト）。エジプトから来たアトゥム、カイン、マハラレル、カイナン。南極から来たエノク、レメク、ヤペテ。この4集団が連合して「神々の集団アヌンナキ」を築いた。また、彼らはヤペテの子として知られる一族を共同で生んだ。

世界から集った神々の種族は、それぞれがメソポタミアに於いて神の種族を成し、神々の集団アヌンナキに参加した。モンゴルで天皇（ティエンホアン）を成した、オケアーニスに属するディオナーは「至高神アン」を生み、ヴァナラシは「至高神アヌ」を生んだ。聖地ヘリオポリスにいたカインとマハラレルは「エンリル」を生み、同じく聖地ヘリオポリスから来たアトゥムは「太陽神ウトゥ」を生んだ。モンゴルから来た獣人エンケラドスは「至高神エンキ」を生み、聖地ヘリオポリスから来たカイナンと、インドを経て南極から来たエノクは「アヌンナキ」の名を成した。

澳門を経て南極から来たレメクは「ラムガ神」を生み、カイナンは「金星の女神イナンナ」を生んだ。冥府ハデス（イギリス）から来たテミスは「豊穡神ドゥムジ」を生み、モンゴルから来た獣人アルゲースとミマーは「英雄ギルガメシュ」を生み、モンゴルを経て日本から来たエビスとヤマトはそれぞれ「原初の水アプスー」「原初の水ティアマト」を生んだ。

レメクと共に東南アジアから来たオケアーニスに属するメーロポシスとティケーは「天地創造の主神マルドゥク」を生み、モンゴルから来た獣人アルキュオネウスは「至高神エル」を生んだ。同じくモンゴルから来た獣人エピアルテースは「天空神バアル」を生み、モンゴルから来た獣人エンケラドスは「英雄エンキドゥ」を生み、エノクと共にインドから来たドラヴィダ人とヴァナラシは「テリピヌ」を生んだ。という具合だ。

## ■マガン王国 ミケーネ文明、ロムルス王、ラーマ皇子誕生の地

「アヌンナキの大移動時代」を機にアラビア半島に渡ったレメク（ラムガ）は、幻の国「マガン王国」を築いた。マガンはロムルスが築いたことでも知られる「ローマ王国」とも呼ばれた。マガン（ローマ）はパンジャブに存在したシバの王国と交流していたが、シバの人々はサビニ人（サバエ人）と呼ばれていた。更に、古代ギリシアに存在したと信じられている「ミケーネ文明」も、実はマガン王国のことであるし、「ラーマーヤナ」で知られるラーマ皇子の説話も、マガン王国での出来事である。マガンの名の由来はレメクとエノクの組み合わせであり、ローマの名の由来はレメクである。マガン王国（ローマ王国）は、アテナイ王国、アルバ・ロンガ王国と共にアラビア半島に共存した。つまり、ローマ王国はイタリアには存在しなかった。

## ■アルバ・ロンガ王国 インド洋を治めたアラビア半島とランカー島の連合国

アルパクシャデは、ムルングと共に「アルバ・ロンガ」をアラビア半島に築いた。主導権を握っていたエウローペーは、紅海を挟んで同盟者であるクサンテーが主導した「ソドム」に隣接する形でアラビア半島に住み、ムルングはランカー島に住んだ。つまり、アルバ・ロンガはインド洋を治めた国家だった。アルバはアラビアに由来しているのだから、アルバ・ロンガはイタリアではなく、アラビア半島に位置していたのだ。

また、BC1027年頃、「ラーマーヤナ」に登場するタナトスの血統、魔王ラーヴァナは、アルバ・ロンガの同盟者ムルングの居城があるランカー島を篡奪し、そこから軍を率いてアルバ・ロンガを陥落するべく、アラビア半島に侵攻した。

その際、マガン王国も魔王ラーヴァナによって攻撃されたが、その時の事件がラーマ皇子の説話として「ラーマーヤナ」に収められた。魔王ラーヴァナによるアラビア半島侵略は、「マハーバーラタ戦争」の一環であった。しかし、激怒した善神デーヴァの比類なき科学力により、魔王ラーヴァナは、アラビア半島の伝説の国々諸共、核兵器によって焼き払われた。「マハーバーラタ」の舞台はパンジャブだったが、「ラーマーヤナ」の舞台はアラビア半島である。

## ■シュメール文明 セムとアーリア人が築いた文明

北極海の冒険を終え、セムはヤレドと連合して「シュメール人」を組み、メソポタミアに帰還した。だが、メソポタミアに帰還したシュメール人は、イサク（イサク族）、シバの王国の人々（アシアー）、アミ族（ニャメ）、マルマ族（モリモ）、モニ族（メネストー）、カウレ族（ガラクサウラー）、アプスーを率いてペルーに入植した。シュメール人は、先発隊の太陽神ピラコチャ（プレークサウラー）たちと連合し、「チムー王国」を建設した。チムーの名の由来はシュメールである。つまり、シュメール文明とはメソポタミアで興ったのではなく、古代ペルー

で興ったのだ。

## ■ソドムとゴモラ タナトスと追従する大量の信者を焼き尽くした科学の種族の怒り

人を喜ばせるのは非常に難しいことであり、神々、真の王、詩人など高貴な精神を育んだ者にのみ可能である。しかし、ウソをつくために神官の衣装を纏ったダーナ神族が、誰にも省みられない醜い泥棒でも人を喜ばせることを可能にした。大量の人々に「幸せなフリをしろ、さもなければ殺す」と脅すのだ。こうして、ソドム（チャド）とゴモラ（クマルビの地）は幸福な人間であふれた。「ソドム」はセムの子アルパクシャデがナイル上流に建てた都であり、「ゴモラ」はクマルビを祀るヤペテの子ゴメルがカッパドキアに建てた都であった。神々（善神デーヴァ族/宇宙人）は、文明放棄を決意した兄弟の末路を見て情けなく思い、ゴミは捨てなければならないという一心から、核兵器を用いてソドムとゴモラを焼き尽くすことを決心した（この状況は現代に酷似している）。神々の言によれば、「真の幸福を求めてダーナ神族と戦うのではなく、生活を保障してもらうためにダーナ神族との戦いを放棄し、幸福を演じるような人々は、死んで初めて人類に貢献する」のだ。ただ、善良な人々がいることも見抜いていた神々はカッパドキアに核シェルターを造らせ、ゴモラに住んでいた戦う意志を放棄しなかった善良な人々を避難させている。

現チャド、リビア、スーダンに君臨したソドム国だけでなく、サハラ砂漠に繁栄したテーバイ王国やアナトリア周辺に繁栄したゴモラ国は荒廃に帰し、当地域の全面的な回復までには数百年を擁した。この「ソドムとゴモラ」の事件を機に、多くの人々が新天地を求めて大航海時代を企画した。「第2次北極海ルート」「ルデ族の大移動」「ドルイド教の大航海時代/西方組&東方組」「シュメール人の大航海時代/東方組&アフリカ組」「シュメール人の第1エジプト王朝建設」などである。

## ■ヤザダ神群 砂漠に姿を変えた土地から来た亡命者たち

核兵器によってソロモンの植民地（カラコルム）が灰になると、生き残ったソロモンの残党は、モンゴルを離れてイランに向かった。その後、ソロモンの残党からはマナセ族が生まれ、新しいイスラエル王国に移住している。また、ディアスポラ後、ソロモンの残党はヨーロッパに移住してゲルマニアを築いている。

## ■マズダ神群 砂漠に姿を変えた土地から来た亡命者たち

核兵器によってソロモンの植民地（カラコルム）が灰になると、生き残った獣人は、モンゴルを



離れてイランに向かった。彼らは途上でドラヴィダ族を迎え入れた。獣人たちはイランに「アフラ・マズダー」を祀り、マズダ神群を結成した。ドラヴィダ族はアナトリア半島に移住してトロイアを建設した。

#### ■ダエーワ神群 砂漠に姿を変えた土地から来た亡命者たち

核兵器によってダヴィデの植民地（タクラマカン）が灰になると、生き残ったダヴィデの残党は、チベットを離れてイランに向かった。人喰い人種を絶滅させるためとはいえ、広範にわたる土地を焼き尽くしたことで、罪悪感を感じた一部デーヴァ族は、科学文明の放棄を決意し、イランに「ダエーワ神群」を結成した。しかし、核兵器使用の恨みにより、ヤザダ神群はダエーワ神群を悪の神々として非難した。もうひとつの善神デーヴァは、隣のインダス文明で人々を監督していたが、マハーバーラタ戦争によって核兵器が使用されると、ダエーワ神群のデーヴァは、アナトリアに移住し、エジプトにテーベを建設する「タバル」となる。

#### ■ベーシュタード王国 海の民とヒッタイト帝国の亡命者によって築かれた国

正義の「海の民」トゥルシア人は、ペリシテ人、チェケル人、ウェシュシュ人、ルカ人、シェクレシュ人などと共に、悪の「海の民」デニエン人、シェルデン人によって国家を滅ぼされたトロイア人、ヒッタイト人の亡命を助け、古代イランの地に誘導した。トゥルシア人ら、海の民は、古代王国の亡命者と共に「ベーシュタード王国」を築き、「サラスヴァティー」「パールヴァティー」など、ヒンドゥー教に於いて重要な神々を生んだ。

#### ■マハーバーラタ戦争 タナトスとタナトスに追従する大量の信者を焼き尽くした科学の種族の怒り

「マハーバーラタ戦争」は、アッシュール・ダン1世が王位を喪失したBC1134年からアッシュール・ダン2世が即位したBC934年までの二百年の間に勃発した。善神デーヴァ族が駆使する科学の力に目を奪われた魔神アスラ族は、流麗なウソを並べて善神デーヴァ族に取り入り、全てを篡奪した上で恩を仇で返した。空中要塞「黄金の都ヒラヤンプラ」を造らせた上で、そのまま居座った魔神アスラ族は手に入れた近代兵器を駆使して世界征服を標榜したのだ。

「こんなに薄汚い人間がいるとは思わなかった」と、タナトスの暴挙に驚いた善神デーヴァ族だったが、彼らは獣人の英雄アルジュナにヴィマナ（UFO）や強力な武器を供与し、魔神退治を指示した。アルジュナが掃討を指示されたパーンダヴァ族は、プント国、シバの王国の住人で、タナトスの宗教に信者で構成された軍事組織だった。プント+シバ=プントバ=パーンダヴァ

となる。このアスラ族による裏切りの一件が善神デーヴァ族に「あんなウソツキと一緒に地上には、もう住みたくない」と思わせ、宇宙に進出させる契機となった。これにより、アフガン  
ー帯、トルキスタンなどの中央アジアの一部地域、パンジャブ～西インドの一部が荒涼な砂漠と  
化した。

## 第六章 ヨーロッパの超古代

---

### ヨーロッパの超古代

#### ■エーゲ 最古の地名のひとつ～超古代の北極圏ヨーロッパに生まれた金髪・碧眼の白人

メラネシア人の顔をしたジュオクは、当時、北極圏であったヨーロッパに移住することで金髪・碧眼・白人の姿を得た。また、ジュオクはエーゲ海を中心に生活していたが、エーゲの名の由来はジュオクである。ジュオク＝ジュオーグ＝エーゲとなる。ジュオクに同行した「河川の娘たち」も、みな金髪・碧眼の白人と化した。アパッチ族を基調にした白人、アイヌ族を基調にした白人、ソマリア人を基調にした白人、メラネシア人を基調にした白人など、さまざまな種類の顔がこの時期に形成された。

#### ■ヨーロッパ人の大移動 金髪・碧眼のメラネシア人とアボリジニの正体

金髪・碧眼の白人と化した「河川の娘たち」は故地を離れ、大挙して東方を目指した。オーストラリアには、同じようにオロクンらの登場によってシベリアからオーストラリアに移動したカオスや獣人たちが待っていた。

白人の姿をした「河川の娘たち」は、アボリジニの姿をしたカオス、獣人の姿をしたギガース、ピグミーの姿をしたピュグマエイと混合し、多くの優れた種族を生んだ。この時にタルタロス、ニュクス、エレボスなどの原初の神々が生まれた。金髪・碧眼・白人の姿をした河川の娘たちがメラネシア人（大洋の娘たち）、アボリジニ（カオス）と混合すると、メラネシア人、アボリジニの身体的特徴に金髪・碧眼の要素が加えられた。

#### ■ガイアの国ヨーロッパハイデルベルゲンシスの正体

タナトスは、大量に獲得したインチキ宗教の信者にウソ・暴力・陰謀を強要し、数で圧倒する形でカオスたちに挑戦した。そのために、平和だったオーストラリアは、精神的な荒廃を余儀なくされた。これを見かねた「カオス」「ガイア」「タルタロス」「エロス」の首長たちは連合し、問答無用でタナトスを狩った。タナトスは、ウソが通じる相手には強いが、ウソが通じない相手には全く無力なのだ。彼らは「カオス」たちの猛攻に四散し、捕らえられたタナトスは遠方に流されることになった。この連行役は獣人アルキュオネウスの子孫である「ガイア」「ウラヌス」が引き受けた。ガイアは、学術的にはハイデルベルゲンシスである。

## ■ティタン神族 オーストラリア・インドから来た獣人と神々の種族

途上のヴァラナシニ入植し、平和に暮らしていたウラヌスだったが、ある時、獣人の部族キュクロプス、ヘカトンケイル、ポントス、テテュスを従えて、ガイア、ジュオクが待つ古代ギリシアに向かった。「神統記」に記されたウラヌス、キュクロプスらは獣人であり、ヘカトンケイルは小型獣人オラン・ペンデクとバントゥー族の祖であり、テテュスはメラネシア人であった。この大移動時代からは、ティタン神族が生まれた。

## ■タナトスの王国時代 美と善の落日

ギリシアを離れてヨーロッパに向かった一部ウラヌスの血を遺伝子に取り込んだタナトスは、更に狡猾さを増した。タナトスは、信者にならなければ生きていけないようにしてやると脅し、行く先々で大量の信者を得た。そして、大勢の弱者たちは生活の保障を求め、進んで人喰い人種に絶対服従を誓った。尊敬する優れた者を殺せと命じられればためらわずに実行した。弱者とはそういうものである。

タナトスからは、アナトリアを支配したリュディア王タンタロス、黒海近辺を支配したティテュオス、エピロスを支配したシシュポス、ラピテースを支配したイクシオン、ドナウ流域を支配したダナオス（子供のダナイスたち）が輩出された。

エピロスの名はアプスーとネイロスの組み合わせであり、その名前からエピロスは黒海からナイル流域までを掌握していたことがわかる。また、ラピテースの名はエウローペーとメーティスの組み合わせであるが、その名前からラピテースはヨーロッパから黒海に至る領域を支配していたことがわかる。そして、ダナイスの名はタナトスとイストロスの組み合わせであるが、イストロスとはドナウの古名であるため、ダナオスやダナイスたちはドナウ流域を支配していたことがわかる。

## ■アルゴス号の大航海時代 獣人の英雄によるタナトスの虐殺と追放

この大航海時代は、イアソンがコルキスに向かう旅路が基本となっている。だが、アルゴス号の乗員は、獣人とオケアーニスを中心に結成されていた。この航海は、太平洋、南北アメリカ大陸、アフリカ大陸を周航した壮大な航海であった。この航海では、古代メキシコに入植した獣人ヘラクレスが金髪・碧眼・白人の姿をしたオケアーニスと混合してメキシコ人を生んでいる。

また、獣人の英雄ヘラクレス、ペルセーイスの両者は、ヨーロッパ～黒海～エジプトに巢食うタナトスの一族を狩り、皆殺しにした上、生き残った者たちをアルゴス号に設置された牢獄に監禁し、タンナ島に連れ戻し、封じ込めた。このときの人喰い人種の大粛清は「神統記」に「タル

タロスに投げ込まれた者たち」の説話で知られている。タルタロスはオーストラリア大陸の古名である。

#### ■冥府ハデス 冥界の河ステュクスと聖地デルポイの守護蛇ピュトンが氷河迫る土地に築いた国

金髪・碧眼・白人の姿をしたステュクス、アドメテは、氷河がすぐそこまで迫っていたブリテン島南部に入植し、当地をテムズと命名した。テムズの名の由来はアドメテとステュクスの組み合わせである。アドメテ+ステュクス=ドメステク=テムズとなる。その後、テムズ流域に暮らした彼らは「テミス」を名乗って古代ギリシアに移住し、ティタン神族に参加している。ブリテン島では、彼らは、サーミ族のような遊牧生活を送っていたと考えられる。

テミスと同時に、オリンポス神族の中核を担うポセイドン、ハデス、ヘスティアが生まれている。3者の名の由来もテミスと同じく、アドメテとステュクスの組み合わせである。テミス、ハデス、ポセイドン、ヘスティアの4者はアドメテ、ステュクスの連合体であり、不可分の存在である。ハデス（アドメテとステュクスの連合体）はヘルメス（ヘルモス）、ペルセポネ（ペルセウス+ヴァナラシ）、ヘカテ（ピュグマエイ+エウドーラー）、プルトーと同盟し、氷河付近の極寒の地に平和に暮らしていた。「冥府」という言葉には重く、怖ろし気な響きがあるが、実際には、古代人が生きていた内に辿り着けないような遠方の地を冥府と呼んでいたに過ぎない。

#### ■ピクトランド 氷上に暮らす小人の伝説

アイヌ族と対立したコロボックルは、北アメリカを超えてブリテン島に移住した。氷河で覆われていないブリテン島南部には、既にアドメテとステュクスの連合体が住んでいたため、遠慮した彼らは氷河に覆われていたスコットランドに住み着いた。「イグルー」などを発明した彼らは「ピクト人」を称し、現在でいうところのピクトランド辺りに居住していたと考えられる。ピクトの名の由来はブカット、或いはベカタンである。グリーンランド、アイスランドには、現地に隠れて住んでいる小人の伝説が伝えられている。だが、これはピクト人の記憶が、現代にまで受け継がれたものだ。彼らは、大地殻変動が起きると古代メソポタミアに移住したが、彼らが、氷河の上で築いた生活・文化は、イヌイットらが継承した。

#### ■全能神ゼウスの時代 クロノスの虐殺と追放

英雄ペルセウス、英雄ヘラクレスなどを生んだ、獣人パッラーズの子孫である全能神ゼウスの連合軍が人喰い人種クロノスと、クロノスが率いる大量の信者の軍団を撃破した。それが「ティタ

ノマキア」「ギガントマキア」である。永い間、クロノスに支配され、かつての力と誇りと栄光を失ったティタン神族は、クロノス亡き後も、道具以上に忠実にクロノスの命を実行し続けた。ゼウスは、かつて、クロノスの姦計によりタルタロス（オーストラリア）に追放されたキュクロプス、ヘカトンケイルを呼び戻し、味方につけた。これにより、ゼウスはクロノスの代弁しかできないティタン神族をギリシアから追放し、タルタロスに封じた。

この戦争は、金髪・碧眼の白人、時にはイラン人の姿をした全能の神ゼウスと、ビッグフット、イエティのような姿をした獣人たちとの戦いであった。ただ、残念なことに、獣人たちは人喰い人種クロノスの支配下にあった。獣人たちは、自分の意志で戦ってはいなかった。彼らは、人喰い人種の意志を宿し、協力してクロノスに立ち向かうべき味方（ゼウス）と戦っていた。獣人の英雄たちは、その比類なき力をもってさえ、非人道的な人喰い人種のウソによって支配下に堕ち、無益な戦いを強いられていたのだ。

ギガース、キュクロプスたちは、ゼウスに敗北すると、ギリシアを脱出してエティオピア王国（東南アジア）、高天原（台湾）、ピサ王国・アトランティス王国・タルタロスの国があるオーストラリア大陸に活路を見出した。名前を見ると、クロノスから解放された獣人の多くは、台湾に渡っていることがわかる。

## ■ノアの箱舟

科学の種族は、イヤなタナトスが存在しない南極大陸の立地条件を非常に高く評価していた。しかしながら、当時、南極大陸の半分は凍結していた。そのため、彼ら地軸を揺らして南極大陸全体をもっと北方にひきあげ、大陸全体を有効活用したいと考えていた。しかし、地軸を揺らしたことにより、逆に南方に移動した南極は完全に凍結してしまい、更には、大地殻変動が地球全域を襲った。

これにより、南極大陸の完全凍結・大規模地殻変動にショックを受けた「ノア」一行は、文明放棄を固く誓い、インド洋を横断してバルト海に向かって旅立った。ノアの箱舟で知られる「ノアの大航海時代」である。メンバーは「聖書」でも知られている通り、ノア、セム、ハム、ヤペテの面々である。セム、ハムはスカンジナビア半島に入植したが、ノアはヌビアに入植し、ヤペテはメソポタミアに入植した。

## ■夏（キア）アカイア人が古代ギリシアに築いた国

「デウカリオンの大航海時代」に参加し、一旦、スーサに身を寄せたあと、ギリシアに入植したアカイア人は「禹（ユ）」を称した。禹は、大地殻変動によって荒廃した古代ギリシアに「夏（キア）」を建てた。禹（ユ）と夏（キア）の名の由来はアカイアである。ここで、断るが、アカイア人による夏王朝は、中国の伝説の王朝「夏」とは無関係である。中国に神話を伝えた者に

よる、故意の時間軸喪失により、情報のパラドックスが起きたというわけだ。同時期にアカイア人と共に古代ギリシアに入植したウラヌスは「ヘレネス人」となり、現代ギリシア人の祖となっている。

#### ■玄武（クアンウ） 大地殻変動の亡命者がウクライナに築いた国

「伏羲と女禍の大航海時代」に加わり、宿神（スシェン）を出発して黒海に進入した、メラネシア人の顔をしたウラニアー、ピュグマエイたちは、現ウクライナに「玄武（クアンウ）」を築いた。クアンウの名の由来はアルキュオネウスである。玄武（クアンウ）は、カシオペア、アンドロメダなどを生んだエティオペア王国の影響を受け、星座に因んだ7つの部族を生んでいる。

#### ■白虎（ベイフー） 大地殻変動の亡命者がアルプスに築いた国

「伏羲と女禍の大航海時代」に加わり、宿神（スシェン）を出発して地中海に進入した、メラネシア人の顔をしたアルペイオスたちは、現スイスに「白虎（ベイフウ）」を築いた。ベイフウの名の由来はアルペイオスである。白虎（ベイフー）は、カシオペア、アンドロメダなどを生んだエティオペア王国の影響を受け、星座に因んだ7つの部族を生んでいる。

#### ■アイルランドの神々の時代

バルト海に向かったノア、東アジアに向かったエノク、西アフリカに向かったエノスらは科学の過信を恥じ、文明放棄を固く誓った。だが、科学の種族は、文明継承を旨に氷河が溶解したスコットランドに入植した。金髪・碧眼・白人の姿をしたトバルカインは、スコットランドのタップ・オノスに基地を築き、一方で、古代サハラに「テーバイ王国」を建設した。また、科学の種族エラド、マハラエルはアイルランドに入植し、神としてエラドは「エリウ」、マハラエルは「マッハ」を称し、古代アイルランドを正しく統治した。一方、マハラエルの片割れは北欧に移住している。実は、マハラエルはマベエとブリアレオースの連合体である。マベエはアイルランドに「マッハ」を生んだが、ブリアレオースはスカンジナビア半島に「フレイ」「フレイア」の兄妹神を儲け、現地人を正しく統治した。

#### ■ラテン王国 カスピ海のほとりにあった伝説の国

スカンジナビアから地中海に移り住んだ金髪・碧眼・白人の姿をしたルデは、セネガル人の姿を

したエノスと共にカスピ海沿岸に入植し「ラティヌス」を祀り、「ラテン王国」を築いた。ラティヌス、ラテンの名の由来はルデとエノスの組み合わせである。ルデ+エノス=ルデノス=ラティヌス=ラテンとなる。つまり、伝説のラテン王国は、イタリア半島にはなかった。その代わり、現トルクメニスタン辺りに首都を置いた彼らは、現モスクワ、ウクライナ、バルト3国に跨る広大な領域を統治し、強大な王国を展開した。

しかし、BC32世紀に起きた「ソドムとゴモラ」の煽りを受け、ラテン王国が滅亡すると、カスピ海的首都を離れたラテン人は、モルディブ諸島に移住し「レディン人」を称した。レディンの名の由来はラテンである。この時、ルデが主導するラテン人は「リディア人」となり、アナトリア半島に入植している。その後、永い時を経て、インド南部に強大な王朝を築き、インド洋を支配下に置いていたチョーラ人がモルディブに干渉すると、レディン人は故地であるカスピ海に帰還し、「モルダビア人」を称した。モルダビアの名の由来はモルディブである。

モルダビア人は、「マハーバーラタ戦争」後に、パンジャブからヴォルガ流域に移り住んでいた科学の種族デーヴァと共存し、平和に暮らしていた。ヴォルガの名の由来はトバルカインである。だが、頻繁に中央アジアを来訪するようになった、凶暴な騎馬民族の中にタナトスを発見すると、悪による科学の悪用を危惧した科学の種族デーヴァは、再び、カスピ海に繁栄したモルダビア人と築いた国を核兵器によって消去した。その後、バルト3国に移住したモルダビア人は「ラトビア人」となった。モルダビア=ルダビア=ラトビアとなる。ラトビア人は、ラテン王国時代の同盟者リトアニア人（リディア人）と共に、AD1991年にソビエト連邦から独立した。

## ■トロイア戦争 神々と人喰い人種との戦争

当時、「女神ヘラ」「女神アフロディテ」「太陽神アポロン」を祀る獣人エピアルテースが古代ギリシアを統べる覇権を握り、王族として古代ヨーロッパ全域を掌握していた。更に、「太陽神ホルス」を祀る獣人パッラスが、ホルスの名に因んで現パリ辺りに「パリス」という拠点を築いていた。また、パリスの人々はアイルランドにも進出し、植民都市「トロイア（デリー）」を築いた。

一方、宗教によって全ヨーロッパのインフラを掌握していたダーナ神族、シェルデン人は、パリス住民のトロイア植民に非常な不満を持っていた。アイルランドは、イングランドを掌握したダーナ神族の次の獲物として位置づけられていたからだ。ダーナ神族は、兄弟であるシェルデン人の賛同を得、自分たちにとって邪魔なエピアルテースの王統を退け、ヨーロッパから追放する計画を練った。

戦争には大義名分が必要だが、無ければ作れば良い。ということで、まず、シェルデン人は「エピアルテース（ヘラ、アフロディテ）がパリス（ホルス）にギリシアの覇権を譲り渡した」旨のウソをついた。このウソを多くの人々が信じたため（タナトスの信者が信じたフリをした）、ギリシア軍のヨーロッパ侵攻に肯定的な世論が一瞬で形成された。

更に、シェルデン人は、牡牛崇拝に帰依していた大量の信者を指揮し、ギリシアを出撃してブリ



テン島に向かった。一方、ダーナ神族は、エピアルテースと家族関係にあるアイルランドの神々「ダグザ」「ヌアザ」「オインガス」「リール」「光神ルー」「フォモール族」などの精鋭を欺瞞によって信者として獲得し、エピアルテースに対抗させることにした。シェルデン人に導かれ、ダーナ神族の勢力圏であるブリテン島に到着した牡牛崇拜の信者軍団は、アイルランドに向かい、体勢を立て直して現デリーに侵攻した。ここに「トロイア戦争」が開始された。

## ■マー・トゥーレスの戦い 神々と人喰い人種との戦争

一方、ダーナ神族、シェルデン人が指揮する牡牛崇拜の連合軍は、トロイアを陥落させ、トロイア市民を虐殺し、女子供は奴隷として拿捕した。また、大陸側では、「太陽神ホルス」を祀る獣人パッラース（パリス）はシェルデン人に指揮された大量の信者の蜂起に曝されていた。これを機に、パリスの人々は、アイルランドの神々に助けを求めるべく、ヨーロッパからアイルランドに渡った。アイルランドに渡ったパリスの人々は、単身「プレス（ホルス）」を、エラドと組んで「豊穡の女神ブリード（アベル+エラド）」を祀り、アイルランドの神々の輪に加わっている。

美しいアイルランドの土地を愛していた科学の種族エラド（エール）、マハラエル（マッハ）は、核兵器使用を決断できなかった。そのおかげで、ダーナ神族の連合は、トロイア攻略に成功した。だが、トロイアを失ったパリスの人々は、せめてパリスを奪還したいと考えていた。そして、パリスの人々は、アヴァロン（スコットランド）に赴き、最後の砦であるトバルカインの協力を仰いだ。だが、トバルカインはヨーロッパの風土を愛していた。そのため、彼らも核兵器で一気に人喰い人種を皆殺しにしようという決断ができなかった。その代わり、近代兵器の使用を断じたトバルカインは、エピアルテースと連合して「フィル・ボルグ族」を結成し、科学の種族でありながら、近代兵器を用いることなく、剣と槍で戦う決意をした。エピアルテース+トバルカイン=ピアル・バルカ=ヒアル・バルガ=フィル・ボルグとなる。フィル・ボルグ族は、スコットランドから現フランスに渡り、パリスを奪還するべく、現ツールでダーナ神族の連合軍と対決した。ツールとは、トゥーレスのことであるが、つまり、「第1次マー・トゥーレスの戦い」の舞台はアイルランドではなく、現フランス南部である。

しかし、ダーナ神族の命令を聞いているだけの仲間（ダグザ、ヌアザ、オインガス、リール、光神ルー、フォモール族）を討つことができず、フィル・ボルグ族は敗北を喫した。続いて、フォモール族も同盟者であるはずのダーナ神族に裏切られ、アイルランドの神々は、ヨーロッパの覇権を喪失した。これが「第2次マー・トゥーレスの戦い」であった。

## ■タップ・オノスの破壊 禁忌の守護～科学を悪の手に渡してはならない

フィル・ボルグ族は、悪に服従しているだけの「かつての仲間」を討つことができずに敗北した。ある意味、タナトスは人質を使って敵を攻撃するのだ。これにより、どんなに強い敵であっても、タナトスは敵に本領を発揮させないのだ。こうして、人類のできそこないでしかないタナトスは、優れた王族に勝つことができるのだ。

とにかく、優れたものをすべて退けてヨーロッパを手中にしたタナトスの連合軍だが、これを幸いにと、彼らは科学の種族の基地があるタップ・オノスに乗り込み、科学の種族の研究成果を篡奪しようとした。惟だけは許すことができなかった科学の種族は、忍び込んだタナトス諸共、基地を核兵器で消去した。科学の力だけは、悪の手に渡してはならないのだ。その後、タップ・オノスの基地を失ったトバルカインは、故地スコットランドを離れ、UFOで龍飛岬に降り立った。

その後のヨーロッパは、ハルシュタット文明、ケルト人、ゲルマン人の繁栄が続き、歴史に強い印象を残しているが、いずれの時代のヨーロッパ人も、タナトスに生活を掌握されていた。彼らは、ローマ共和国、ローマ帝国に侵攻する駒として、常にタナトス教（ドルイド教など）の指揮下にあった。

## 第七章 日本の超古代史

---

### 日本の超古代史

#### ■アイヌ族 古代イランからの訪問者

イラン人の顔をした至高神ズルヴァーンは、ある時、イランから東南アジアに移住した。ズルヴァーンを構成していたアシェラーフはアシアー、エウローペーを生んだ。一方、ズルヴァーンを構成していたウェネは、エバシと共にアメリカ大陸に向かう行軍に参加した。だが、彼らはアメリカに至る途上、日本列島に足を止めている。この時、北海道に「アイヌ族」が、東北地方に「蝦夷（えびす）」が生まれた。アイヌの名の由来はウェネである。ウェネ＝ウイネ＝アイヌとなる。アイヌ族は、北海道を拠点に樺太・カムチャツカ地域にも進出し、巨人の大地「盤古」の主である、獣人の部族やクウォスらと交流を図った。かように、「アイヌ」は非常に古い人類ということができる。

#### ■蝦夷（えびす）の国 東北地方、北アメリカ、古代マヤを結んだ古代連邦

アパッチ族の顔をしたエバシは、古代東北地方に「蝦夷（エビス）の国」を築いた。エビスの名の由来はエバシである。国家と言っても、彼らは水生生活をしていたため、陸に挙がるのは就寝時くらいのものであった。エバシは一旦、北アメリカ、ユカタン半島にまで足を伸ばし、再度、数千年かけて泳ぎ、東北地方に戻った。古代マヤには「太陽神アプチ」を残している。インドネシアの「ヴェシ族」、台湾の「バブサ族」、東北地方の「蝦夷（えびす）」、北アメリカの「アパッチ族」、古代マヤの「太陽神アプチ」は、互いに交流しながら連邦王国とし機能した。超古代に存在した、幻の環太平洋王国といえるかもしれない。

#### ■ヤマトの国 メラネシア人の顔をした大和人

メラネシア人の姿をした「ティアマト」は、アドメテーの後裔である。アドメテー＝アディアメテ＝ティアマトとなる。彼らは、反自然の種族がオーストラリアを席卷すると、これを嫌って故地を離れた。オーストラリアを後にしたティアマトは、日本に上陸した。彼らは、畿内に「ヤマトの国」を築いた。国家と言っても村落の集合体に過ぎなかった。ヤマトの名はティアマトに因んだ非常に古い名前である。ティアマト＝ティヤマト＝ヤマトとなる。

## ■葦原中津国 天草諸島～八代湾に存在した伝説の国

イラン人の姿をしたアシアーと、金髪・碧眼・白人の姿をしたグレニコスは、九州南部（島原半島～天草諸島、八代湾に至る地域）に入植し、共同で葦原中津国を築いた。葦原中津国の名の由来はアシアーの原とグレニコスの国の組み合わせである。アシアー+原+グレニコス+国=アシ原+ニコス国=葦原中津国となる。ただ、葦原中津国は2種類存在した。アシアーが治めていたアナトリア半島とグレニコスが治めていたナクソス島を含めた領域、つまり、エーゲ海も、古代台湾では葦原中津国と呼ばれていた。

## ■海神宮（わたつみかみのみや）の国 但馬国に存在した伝説の国

金髪・碧眼・白人の姿をしたアドメテーは、大和地方にいたティアマトと連合して「綿津見（海神宮）」の国を建設した。ワタツミの名の由来はアドメテーとティアマトの組み合わせである。アドメテー+ティアマト=アドティアマ=アトチャマ=ワトチャミ=ワタツミとなる。また、海神宮（ワタツミノカミノミヤ）とは但馬国のことであり、現兵庫県北部に存在していた。ワタツミ=ワタジマ=但馬となる。つまり、但馬の名が、伝説の「綿津見（海神宮）」の国が、現兵庫県北部に存在した証である。

## ■コロボックル アイヌと共存した謎の小人族

ブガット族（ピュグマエイ）、カリス族（クリュセーイス）、ウエダ族（エウドーラー）は、「ピクト人の大航海時代」を敢行し、ヨーロッパを目指して、東南アジアを離れた。だが、彼らはまずその途上で足を止め、北海道に入植した。彼らは、北海道に「コロボックル」を生んでいる。当時、小人族であったブガット族は、小さい身体に拘り、身長が低いことに誇りを持つことにより、偉大な先祖アブクに敬意を表した。カリス族、ウエダ族はブガット族に吸収され、彼らは小人族コロボックルとして、アイヌ族の生活圏に隣接する形で北海道に暮らした。クリュセーイス+ピュグマエイ+エウドーラー=クリュピュグラ=クリョピュグラ=コロボックルとなる。

伝説によれば、アイヌ族がコロボックルの娘を拉致したことで、怒ったコロボックルは「トカップチ！」という捨て台詞を残し、北海道を去ったとされている。この「トカップチ」は「十勝」の語源であるが、「水よ、腐れ！肴よ、腐れ！」という意味を持つといわれている。ただ、トカチの音は「チュクチ」にも似ている。つまり、アイヌに怒ったコロボックルは、チュクチ族が治めるシベリアに向けて旅立った、と捉えることも可能だ。

最終的に、チュクチ族を加えた「ピクト人の大航海時代」はブリテン島に辿り着いた。しかし、先発隊に遠慮した彼らは、氷河に覆われたブリテン島北部に「ピクトランド」を築き、イグルー

などを発明した。この時に参加したチュクチ族は、アイルランドに入植して「ダグザ」となっている。ダグザの名の由来はステュクスである。ステュクス＝スタクサ＝ダグザとなる。

#### ■神の島「生口」 瀬戸内海を続べたシベリアの王族

高天原の台湾人は、ステュクスの子孫チュクチ族が治めていたオホーツク地域を「幸（さち）」と呼んでいた。幸の名の由来はステュクスである。ステュクス＝スチュクス＝スチュ＝幸（さち）となる。山幸彦の物語は、チュクチ族がシベリアから海神宮の国（現兵庫県北部）を訪れたことを記したものだ。その後、山幸彦（チュクチ族）は、ワタツミ国から「瀬戸内海」に移り住み、「生口島（いくち）」に拠点築いた。瀬戸の由来はステュクスであり、生口の由来はチュクチである。因島の真横に隣接していながら、地味な生口島は、全国規模で名を知られているわけではない。だが、古代から神の島と呼ばれ、後白河上皇、行基などが訪れている。その理由が永らく謎だったのだが、生口島はステュクスの島だったため「神の島」と呼ばれていたことがわかった次第である。村上水軍が栄華を極めていた時代、生口島では「生口水軍」が結成されたこともある。

#### ■出羽の国 ヴァルハラ、ミドガルドの亡命者が建てた国

マヤに居住していた科学の種族トバルカインは、タナトス（悪竜ニドボグ）と、その信者によって墮落を極めたヴァルハラ（メキシコ）とミドガルド（ネバダ）の惨状を黙認することができず、まるごと焼き尽くすことを決定した。それが「最終戦争ラグナロク」であった。核兵器によって荒廃した、現ネバダ、メキシコ北部を離れた人々は、科学の種族に導かれて蝦夷（えびす）の地を踏んだ。科学の種族は、現地を「出羽」と命名した。出羽の名の由来はトバルカインである。トバルカイン＝テーヴァルカイン＝デーワ＝デワとなる。

1万3千年頃から数千年間、世界を寒冷期が覆う。これは、世界を蹂躪するタナトスの勢力を焼き尽くすために、科学の種族が核兵器を用いて伝説の国々を焼き尽くしていた時期と重なる。この時滅亡した国には、ネバダに存在したミドガルド国、メキシコ北部からユカタン半島にかけて存在したヴァルハラ国だけでなく、オーストラリア南西部に存在したアトランティス王国も含まれている。

虚言に塗れた人喰い人種タナトスがない、平和で安らかな生活。その、人類の切なる願いを基調に建てられた出羽の国は、金髪・碧眼の白人（科学の種族）、マヤ人、メキシコ人、アメリカ・インディアンの顔をした人々とアイヌ族の顔をした人々で賑わった。これが東北地方の縄文人の正体でもあった。縄文人と科学の種族は、お互いに欠けているものを補い合って共存した。縄文人は、狩猟によって得た肉・魚介類、採集で得た果物・野菜を供物として科学の種族に捧げ、卓越した知性を誇る科学の種族は、代わりに縄文人たちに知恵を授けた。これが、正しい人類

のあり方である。科学の種族は、ドラえもんがのび太に道具を与えたように、最新の科学によって生み出された道具を、縄文人に与えることはしなかった。科学の種族は、難解なサインを出して彼らに答えを問うことで、彼らを真の文明人として育成することを試みた。難解なサインを理解した者は救われたが、理解できなかった者は滅んだ。厳しいが、これは知能によって淘汰を免れたできそこないに対する、優れた人類による正統な人工淘汰である。

## ■武蔵の国と蛭子神の誕生 チムー王国の王族が日本に亡命

シュメール人の懇願により、出羽に住んでいた科学の種族がチムー王国に寄生したタナトスを核兵器で消去した。その後、チムー王国の人々やペルー人は、砂漠と化した故地を後に、出羽の国を目指して船出した。新天地を求めたピラコチャ（プレークサウラー）は、蝦夷（えびす）を離れると南方に向かい、葦原中津国に立ち寄った。太陽神ピラコチャは、現地人に「蛭子（ヒルコ）」と呼ばれた。蛭子の名の由来はピラコチャである。ピラコチャ＝ヒラコチャ＝ヒルコとなる。一方、ペルーに「パチャママ」などの神を生んだミマースは、東北地方から関東地方に移って「武蔵国」を築いた。武蔵の名の由来はミマースの祖ムシシである。ムシシ＝ムシャシ＝武蔵となる。

## ■龍飛岬 UFOから降り立った不思議な旅人

ある日、科学の種族と暮らす縄文人たちの前にUFOが飛来し、搭乗者たちが東北の地に降り立った。当時、東北地方には、1万3千年前に北アメリカ（ネバダ周辺地域）、メキシコ北部、ユカタン半島からきた人々と、40万年前から先住している蝦夷（えびす）が暮らしていた。その不思議な旅人は、BC5千年頃に蝦夷の地を訪問し、自身が降り立った地を「龍飛岬」と呼んだ。縄文人たちは彼らを見ても驚くことは無かった。なぜなら、彼らは出羽に住む科学の種族とは兄弟だったからだ。

当時、古代ヨーロッパ（パリ～ツール）～アイルランド（デリー）を含めた広大な地域に、科学の種族とタナトスとの大規模な戦争が繰り広げられていた。タナトスは、科学の種族の最新兵器を篡奪しようと、科学の種族が暮らすスコットランドの基地に侵入した。だが、科学の種族は、タナトスによる科学の悪用を防止するため、核兵器を使用してタップ・オノスの基地を完全に破壊した。龍飛岬の宇宙人は、タップ・オノスから来た科学の種族であった。龍飛の名の由来は、言わなくてもわかるだろう。出羽の国には、マヤとスコットランドから来た科学の種族が暮らしていた。青森県には宇宙人が住んでいたのだ。ところで海外では、日本人の顔をした宇宙人の目撃報告がある、彼らは間違いなく、出羽の国の東北縄文人の子孫だろう。

## ■出雲の国 ドルイド教による古代日本上陸

「ソドムとゴモラ」の事件を機に、大航海時代に漕ぎ出した、イラク人の顔をしたドルイド教は、台湾を経て、古代日本の地に出雲国を築いた。出雲の名の由来はアトゥム、或いはアダムが訛ったエドムである。エドム＝エゾム＝イズモとなる。出雲国は、エバシが築いた蝦夷国（エビス）、ティアマトが築いた大和国（ヤマト）、アシアーとグレニコスが築いた芦原中津国（島原半島～天草諸島・八代湾）、アドメテーが築いた海神宮（ワタツミノカミノミヤ/但馬国）、科学の種族トバルカインが築いた出羽国、獣人ミマース（モーゼス）が築いた武蔵国、ウェネが北海道に生んだアイヌの地に次いで、超古代日本史上第8番目の国家となる。

## ■伊勢国 ユダヤ人のふるさと～ユダヤ教の原型である神道

7万年前、「アルゴス号の大航海時代」の際、ペイトーとエウローペーはアラビア半島を切り拓いて「アデン」を築き、「軍神女神アテナイ」を生んだイデュイアとウラニアーは「アテネ王国」をアデンに築いた。「ソドムとゴモラ」以前のアラビア半島は、水と緑に溢れた、色彩豊かな風土を誇っていた。しかし、BC32世紀に「ソドムとゴモラ」の事件が起きた際、科学の種族はテーバイ王国、ソドム国、ゴモラ国と共にアラビア半島のアテネ王国に寄生していたタナトスを核兵器により焼き尽くした。

砂漠と化した故地を後にしたイデュイアは、「ドルイド教の大航海時代」に参加して日本に赴き、ドルイド教と共に出雲に上陸した。その後、イデュイアは単身北上し、伊勢半島に「伊勢」を築いた。伊勢の名の由来はイデュイアである。イデュイア＝イジュイア＝イシュイア＝伊勢となる。イデュイアは、伊勢に「伊勢神社」を創建すると共に「神道」の全容を準備し、体系化した。伊勢神社を創建したイデュイアだが、彼らは自身を「ユダヤ人」と称していた。ユダヤの名の由来はイデュイアである。イデュイア＝ユデュイア＝ユダヤとなる。

ユダヤと似た名前、ユダ族の「ユダ」はエウドーラーに由来する。そのため、「ユダ」の名は、イデュイアの「ユダヤ」とは系統が異なる。似て非なるものだ。日ユ同祖論は、「ソドムとゴモラ」を機に、アテネ王国のイデュイアが日本に移住したことに端を発している。日本人がユダヤ人の子孫であるどころか、真のユダヤ人と日本人（伊勢の人々）は不可分の存在なのだ。真のユダヤ人は、日本人とアラビア人（イデュイア）のハーフのような顔立ちをしていたことだろう。

## ■十和田と津軽の国 ダヴィデ王とピラミッドの種族の故郷

大地殻変動後、科学の種族トバルカインは、出羽、タップ・オノス、テーバイ王国（サハラ）の3ヶ所に居住していた。BC32世紀、不快なタナトスと、生活の保障を得るために進んで悪

に従う大量のタナトス教信者たちに激怒した科学の種族は、ソドム国、ゴモラ国、アテネ王国、そして自身の国テーバイまでも、核兵器で消滅させた。アメリカン・プロテスタントに原爆を落とされた広島や長崎でさえ、砂漠化することは無かった。それは、どれだけ大量の核兵器がテーバイ（サハラ）、ソドム（チャド、スーダン、リビア）、ゴモラ（カッパドキア）、アテネ（アラビア半島）で使用されたかを示している。

自身の王国テーバイを消去した科学の種族は、出羽に住む兄弟を訪ねてUFOでやってきた。一方、BC32世紀、「ソドムとゴモラ」を機に「第2北極海ルート」が実施された。シベリア・北極海を抜けるという過酷な冒険を経て、「第2」の参加者であるティカル人とプテは、北極海を抜けると、南下して出羽を目指した。

ティカル人に目をかけていたテーバイ王国の科学の種族は、彼らが参加していた「第2」の途上、共同でオビ河上流部に巨石建造の実験を行った。両者は、高さ40m、横の長さ200mもの巨大な遺物を、BC32世紀のシベリア南部・ショリア山中に残した。長方形に整えられた人工的な巨岩が積み重ねられているが、巨岩ひとつの重量は3000トン前後である。この巨岩は、現代人の知識では動かすことさえ不可能といわれている。この時に科学の種族に世話になったティカル人は、再度、科学の種族に会うために出羽を訪れた。

出羽を訪れたティカル人は拠点に「津軽」と命名し、テーバイ出身の科学の種族はプテと組み、「十和田」と命名した国家を築いた。津軽の名の由来はティカルであり、十和田の名の由来は出羽とヴィディエ（プテ）の組み合わせである。ティカル＝チカル＝チガル＝津軽となり、デワ＋ヴィディエ＝デワディエ＝テワディエ＝十和田となる。

科学の種族は青森県でも、ティカル人と共同でピラミッド建造を実施した。この時に建造された彼らの作品が、「御門岩」と「黒又山」である。尤も、御門岩は十和田湖の湖底に沈み、頭部だけが少し、湖面に浮いているに過ぎない。これはいったい、水が無かった頃に建造されたものなのか、或いは、水中で建造されたものなのか、全くの謎である。一方、黒又山は巨石を積み上げるのではなく、もともとあった山を、人工的に山肌を削り、ピラミッド型に容貌が整えられたものだ。黒又山の建造を機に、単身で行動開始したティカル人は、出羽の国を離れた。彼らは「葦嶽山」を建造後、実験で得た成果を携え、太平洋の島々を渡り歩き、ペルー・アマゾンで実験の最終仕上げを施した。その後、大西洋を横断したティカル人は、ダカールを経てエジプトのサッカラに移住している。

## ■イスラエル王国 モンゴル、チベットに植民地を築いた高天原と葦原中津国の連合王国

BC32世紀に「ソドムとゴモラ」が発生すると、パンジャブにいたシバの王国の人々は、放射能の影響を恐れ、王国を放置して一時的にインドを離れた。彼らは、先祖が築いた故地、八代湾～天草諸島に跨る「葦原中津国」に帰還した。シバ人は、高天原（台湾）に立ち寄った折、ロア族と意気投合し、連合王国の建設を約束した。ここに「イスラエル王国」が誕生した。イスラエルの名の由来はアジア（シバ人の祖）とブリアレオース（ロア族の祖）の組み合わせである。



アシアー+ブリアレオース=アシャリオレ=イスラエルとなる。

真のイスラエル王国は、南九州・八代湾～天草諸島の人々と台湾人による連合王国であった。この連合に、蝦夷（えみし）の国、津軽の国、出羽の国、十和田の国、武蔵の国、大和の国が加わった。

#### ■預言者エリヤと仲間たち 南北分裂時代のイスラエルに移住した日本人の集団

日本、台湾、モンゴル、チベットを統治したイスラエル王国が滅ぶと、アシアーは「ヨシュア」として西方に侵攻し、エジプトに入植したが、その後に「アシェル族」としてカナンに新しい「イスラエル王国」を築いた。アシアー=アシュアー=ヨシュアとなり、アシェラーフ=アシェルーフ=アシェルとなる。ヨシュア、ヨセフ、アシェルなどは、みなアシアー（アシェラーフ）の後裔であるため、不可分の存在であると考えたい。

南北に分裂してはいたが、新しいイスラエル王国建国の噂を聞いた日本の人々は、九州、瀬戸内海、沖縄諸島から地中海のカナンに馳せ参じた。ただ、新しいイスラエルにはダン族がいた。そのため、人々は日常生活の保障を理由に、進んで、邪教（バアル崇拜、ダゴン崇拜、悪魔アモン崇拜など）に服従した。日本人の顔をした預言者たちは、市民をできそこないのウソから解放するためにタナトスの邪教と戦う活動を開始した。

その後、日本はしばらく縄文時代と弥生時代が継続した。日本の歴史が動き出すのは、満州の王族「天皇家」から生まれた欽明天皇、宣化天皇が日本に移住してからだが、その間も日本武尊（巨石の種族マウンド派）、熊襲武尊（巨石の種族ピラミッド派）の戦いや「大和人の大航海時代」による東アジア人による大規模なブリテン島入植など、エポックメイキングなできごとが、立て続けに起きた、

## 第八章 オーストラリアの超古代史

---

### オーストラリアの超古代史

#### ■神統記の舞台オーストラリアに原初の神々が集う オリジナル人類の連合体が誕生

オロクン・オロルンのシベリア訪問を機に、争いを好まないカオスは犬（ディンゴ）、豚などの家畜を連れて、ギガスと共に南方に向かった。途中の東南アジアでピュグマエイを仲間に迎えた3者は、オーストラリア大陸に移住した。そこに金髪・碧眼の白人であるオケアーニスもヨーロッパからやって来た。この複合的な大移動時代の出会いにより、4つの異なる人類が混合し、原初の神々、オケアーニスの残りの42部族と反自然の種族が同時に生まれた。

#### ■虹蛇の世界 知能を持つ人類のあるべき姿～真の宗教

4つの異なる人類が混合することにより、原初の神々、オケアーニスの残り42部族など、優れた種族が多く生まれたが、それ以上に、この時代は、無力な人々、そして人類のできそこないが大量に生まれた時代となった。知恵者であるカオスは、優れた者にも欠けている部分があることを認め、優れた者と無力な者が、お互い、足りない部分を補い合い形で共存することを唱えた。これが人類史上初の宗教的概念「虹蛇」である。優れた者たちは虹蛇の神官となり、大量の無力な人々を信者として統治した。

できそこないというと語弊があるが、簡単にいえば、人類のできそこないとは、進化の過程で人類が排除してきた個体である。つまり、性格が悪い、良心が無い、知能を悪用する、知性に欠ける、罪悪感が弱い、弱者に強い、うそつき、人殺し、人喰い人種などとなる。このようなできそこないが集まり、反自然の種族が誕生した。

古代から現代に至るまで、一貫して人類は平等ではない。つまり、王者がいる一方、無力な者がいる。単純肉体労働が苦にならない者がいれば、苦になる者もある。だが、これは能力の差でも、優劣の問題でもない。単に、人類の自然の姿でしかない。人類は各々、異なる資質を持つ者同士がお互いの欠点を補い合うために知能は発達させてきた。優れた者は、苦手な単純肉体労働を克服する必要はないし、無力な人々は、頭脳明晰な優れた人物に取って変わることは不可能なのだ。

単純肉体労働を得意としない神官のために、無力な人々は信者として食料調達に従事し、神官は代わりに無力な人々のために知恵や力を授けた。これが正しい人類の姿であり、あるべき宗教の型である。当初、こうしてカオスたちは大量の無力な人々、更には反自然の種族をうまく治めていたが、反自然の種族が、無力な人々、できそこないの方が優れた者に数で勝ることに気づいた、反自然の種族の首領ニクスは、数で圧倒する形で優れた虹蛇の神官たちに対して挑戦するこ

とを始めた。彼らは、虹蛇に似た邪教をつくり、脅しと欺瞞によって大量の信者を虹蛇から篡奪し、自身の邪教の信者として獲得した。この方法を洗練させたのが死の種族タナトスである。

## ■反自然の種族 自然淘汰を免れることを覚えた人類のできそこないたち

反自然の種族は、獣人、カオス、オケアーニス、ネグリトの部族の中でも、優れた人々に嫌われていた、淘汰されるべき個体が連合することによって生まれた。ニクス（グレニコス）から離脱した嫌われ者の個体は「ニクス」を称し、反自然の種族の首領となった。チンパンジー、ゴリラのようにハーレム制を採っていた人類だったが、反自然の種族は、ボスと対等に戦うのではなく、多数の嫌われ者（モテない男たち）数十人を動員し、集団で数人のボスを虐殺することを覚えた、努力して強くならずとも、簡単に強いものを倒すことができるのだ。この時に禁忌が破られた。

人類はその誕生時から優れた者を求めて進化してきた。これはどんな生物も同様であり、天上の理に明記された自然の法則である。だが、人類の場合、淘汰を運命付けられた個体も人類であるがゆえに知能を持っていた。ニクスたちは、劣っている者でも、数で圧倒すれば強い者に勝ち、欲しいものを手に入れ、すべてを思いのままにできることを発見した。優れた者に劣る彼らは、通常なら淘汰されるどころだが、その発達した知能を活用し、生まれた知恵によって淘汰を免れ、淘汰されることがないはずの優れた者を、逆に、人工的に淘汰することを覚えたのだ。ニクスの子として、モロス（定業）、ケール（死の命運）、タナトス（死）、ヒュプノス（眠り）、オネイロス（夢）、モモス（非難）、オイジュス（苦悩）、モイラ（運命）、クロト・ラケシス・アトロポス（命運）、ネメシス（憤り）、アパテ（欺瞞）、ピロテス（愛欲）、ゲラス（老齢）、エリス（争い）が生まれているが、いずれもカオス、ネグリト、獣人、オケアーニスの中の嫌われ者たち（淘汰されるべき個体）で結成された。

## ■ノドの地 人喰い人種タナトスが体系化した邪な宗教

中でも、タナトスは史上初の人喰い人種として地上に誕生した。タナトスは、神々の種族ディオーネーとクリュティオスのできそこないが寄り集まって結成された。彼らは、虚言症を患い、殺戮を無上の喜びとしている。誰にも省みられない醜い彼らは、美德、優れた者、偉大な王を憎悪し、反自然を旨に、強力な復讐心を原動力にしている。この復讐心を絶やさぬために、タナトスは娘に好きでもない男の子供を産むことを代々、強要している。これにより、娘たちは子供たちを憎みぬぎ、幼児でも平気で食い殺すことができる強大な復讐心を育てている。

また、ホモサピエンスよりも大脳の容量が多い彼らは、できそこないの方がたくさん生まれるという自然の摂理に気づいた。これにより、力が強い、優れた者と直接対決して退けるのではなく、生活を守るためなら人喰い人種にも絶対服従を誓う大量のできそこないを掌握し、ウソを真実

に変え、優れた者を数で圧倒するという、人類の発展に寄与しない戦術を開発した。つまり、劣る者が優れた者を倒すのだ。これは自然界では絶対に存在しない事象であり、非常に不自然なことである。タナトスは、反自然の申し子なのだ。どれだけ多くの人々が自分のウソを信じるか。これが彼らタナトスの生命線であり、至上の命題である。非常に危険な、我々とはすべての点に於いて異質な人類であるが、そんな彼らも、名前に於いてはウソをつけないという性質がある。彼らは、学術的にはネアンデルタールである。この大移動時代からは、虚言症、人喰い人種、殺人鬼、人身御供の種族が生まれた。

## ■冥府タルタロス テュロス王国の前身

「ウラヌスの大移動」に参加しなかったタルタロスは、単独で古代オーストラリアを統治し、カオスらの留守を守った。「神統記」では、タルタロスが守るオーストラリア大陸は「冥府」と呼ばれた。4万年前の「ティタノマキア」に於いて、全能神ゼウスに敗北すると、クロノスから解放されたティタン神族が、大挙してギリシアからオーストラリアに帰還した。ヘシオドスは、ティタン神族のオーストラリア帰還を、タルタロスに封じ込められたと「神統記」に記した。その後、オーストラリア西北部にピサ王国、西南部にアトランティス王国が建設されると、タルタロスの領域はオーストラリア東部に限定された。後に、アゲノールがタルタロスを統治すると、タルタロスは「テュロス王国」と呼ばれた。

## ■ピサ王国 東北縄文人が築いた国

反自然の種族の台頭を嫌い、一時的に東南アジアから黒海に入植していたエバシは、金髪・碧眼・白人の姿をした「アプスー」として、黒海からオーストラリア西部に移り、「ピサ王国」を築いた。アプスー、ピサの名の由来はエバシである。

## ■アトランティス王国 オリンポス神族と人喰い人種が築いた国

冥府ハデス（ブリテン島）を発ったオリンポス神族は、ユカタン半島を経てペルーを来訪し、南米大陸を南下して人類史上初の南極大陸上陸を果たした。その後、彼らは南極からオーストラリア西南部にたどり着き、当地に「アトランティス王国」を築いた。オリンポス神族から「アトラス」が生まれたが、アトラスの名の由来はアドメテーとエロスの組み合わせである。アドメテー＋エロス＝アドロス＝アトラスとなる。その後、オリンポス神族は、クロノスを倒すためにオーストラリアを離れたが、アトラスはタナトスと連合して「アトランティス王国」を築いた。アトランティスの名は、アトラスとタナトスの組み合わせである。アトラス＋タナトス＝アトラナ

トス＝アトランティスとなる。その後、邪教を興したタナトスがアトラスの王族を支配層から退けると、アトランティス王国は大英帝国、アメリカ合衆国の如く、世界征服を標榜して世界各地に侵攻した。

## ■製鉄の種族ティタン 楽器ディジリデューはふいごだった～タタ製鉄、トヨタ自動車の先祖

ティタン神族が製鉄技術を開発すると、アトランティス王国は鉄製の武器を量産した。アボリジニの伝統的な楽器ディジリデューは、当時のふいごの名残りである。ティタン神族は、大地殻変動後にはメソポタミアに移って「タタ」を称しているが、タタール人、多田羅製鉄、インドのタタ製鉄（タタ財閥）、豊田氏は製鉄の種族であるティタン神俗の子孫である。

とにかく、製鉄技術を開発したものの、邪教によってアトランティスを掌握していたタナトスは、ティタン神族の製鉄技術者を奴隷のように扱い、大量の鉄を量産させ、殺傷力の高い剣、槍を作らせた、これら鉄製の兵器を与えられたアトランティス人兵士は、大型の軍艦に搭乗し、大英帝国の如く、世界各地に侵攻した。アトランティス王国の技術水準は17世紀のヨーロッパ程度だったと考えられる。タナトスが指揮するアトランティス王国は、アテナイ王国（アラビア半島）、ミドガルド（現カリフォルニア～ネバダ）、ヴァルハラ（メキシコ北部～マヤ）、ティル・ナ・ノーグ（ペルー）などの古代王国に侵略戦争を仕掛けた。

## ■邪悪な帝国の滅亡 アトランティス王国の消去～地球の番人の登場

南極（ムー帝国、またはローマ王国）に住んでいた科学の種族エラド、マハラエル、トバルカインは、スーサのゼウス、ギリシアのプロメテウスなど、聖なる王族の要請により、タナトスを焼き尽くすための大量破壊兵器の開発を行った。この時に人類史上初の核兵器が誕生した。北アメリカを攻めていたタナトスは、邪教によってミドガルド王国の市民を信者として大量に獲得し、数で圧倒する形で、ヴァルハラ王国に侵攻させていた。汚らわしいタナトスと、悪に追従する大量の愚か者（信者）を焼き尽くすべく、科学の種族は現ネバダ、メキシコ北部に核兵器を大量に投下した。これが北欧神話に伝えられている「最終戦争ラグナロク」である。

科学の種族は、生活の保障のために進んで悪に従う信者たちを、タナトス以上の悪と定めていたため、大量の信者を焼くことも厭わなかった。逆に、愚か者が人類の発展に寄与するためには「死」しかないと考えていた。これにより、現ネバダ、メキシコ北部、アラビア半島の一部、オーストラリア大陸西部が荒涼な砂漠と化した。これらの砂漠の存在は、科学の種族が、核兵器でタナトスに汚染された古代都市を焼いた証拠である。

ただ、原爆を投下されたとはいえ、広島、長崎は砂漠化していない。つまり、ネバダ、メキシコ北部、オーストラリア西部に、いったいどれだけ多くの核兵器が投下されたのか。それにより、科学の種族や世界の王族が、どれだけ、タナトスを嫌悪していたか。祖の気持ちが時を超えて

伝わってくる。

ただ、現代も、超古代の時代と変わらず、相変わらず世界はタナトスによって支配されている。大乘仏教が日本、中国南部、チベット、上座部仏教を、朝鮮儒教士林派が韓国を、アメリカン・プロテスタント連合がアメリカ合衆国を、聖公会がイギリス連邦を、クリュニー会・シトー会・ドミニコ会がカトリック世界を、ルター派が北欧を、バラモン教がインドを、ハナフィー派・シャフィイー派・マーリク派・ハンバル派がイスラム世界を裏から支配し、世界の権威・常識を操作し、世界中の人々の生活を支配している。怒った科学の種族（U F Oに乗っているのが宇宙人と呼ばれている）が、いつ世界を焼き尽くすか、現在、世界は何が起きてもおかしくない状況下にある。宇宙人は、「地球の番人」である。

### ■デウカリオンの大航海時代 オーストラリアに残されたカオスの後裔

世界中の沿岸部が9日間、海の底に沈んだ。この時、オーストラリアでは、ティタン神族による製鉄の痕跡も、アトランティス王国の亡骸も、すべて洗い流された。一方、脱出の準備万端であったデウカリオン、ピュラはティタン神族を船団に迎え、オーストラリア大陸を脱出した。その途上、一行の船団はメラネシア地域でオケアーニスたちを、ガンジス流域に赴いて、ヴァラナシ（ウラヌス）を船団に迎え入れてメソポタミアの地に向かった。その後、オーストラリア大陸に残された一部カオスの子孫は、白人から「アボリジニ」と呼ばれ、イギリス人が入植するまで古代と変わらない生活を送ることになる。聖公会は、先祖であるタナトスを虐殺したアボリジニを快く思っておらず、配下の警察によるあからさまな不幸逮捕により、アボリジニの人口削減を謀っている。

### 南極の超古代史

#### ■ムー帝国 ローマ帝国の神々の国

ティル・ナ・ノーグは、国際的な都市だったため、いろいろな顔の人々が集まっていた。彼らが混合を繰り返し、現代ペルー人の姿が形成された。その後、人口過密が要因となり、レメクが率いるペルー人の船団はオリンポス神族が発見した南極大陸に入植した。この時に、「ムー帝国（またはローマ王国）」が生まれた。更に、ユピテルをはじめとして、ローマ神話で神々として知られている神々は、オケアーニス、獣人たちの混合により、ムー帝国時代の南極で生まれた。

レメクたちは、ティル・ナ・ノーグやモホス文明で得た技術と知識を、南極で更に先鋭化し、発展させた。その後、南極で育まれた科学文明は、UFO、テレポート技術、思考読み取り装置などを開発する科学の種族（宇宙人）が継承していくことになる。

南極はムー帝国の他に、ローマ王国、アヴァロンなどとも呼ばれた。だが、正式には「ローマ王国」と呼ばれていた可能性が高い。ムーやローマの由来はいずれもレメクである。南極大陸には、ローマ帝国の神々として知られる、ユピテルからクピドに至る神々の種族が暮らしていた。その後、AD 1年前後にローマ帝国がイタリア誕生すると、南極時代の記憶が復活し、優れた王族の記憶が語り継がれ、ユピテルたちはローマ帝国の神々として採用された。

#### ■南極大陸に天孫降臨 ノア、セム、ハム、ヤペテ誕生の地

突然だが、天孫降臨は2つある。2つめは「フェニキア人の大航海時代」でも紹介したように、BC 7世紀に天孫族（マゴ）が澳門から日向国に入植する話であるが、最初の天孫降臨は、ニニギ（エノク）が、台湾（高天原）を離れ、科学の種族が暮らす南極大陸に入植する話である。ニヤメとドーリスが生んだ「天照大神」は、ティアマトの国（大和）に、エノクと獣人、ヴァナラシの連合体を送り込んだ。その後、ニニギは大和国で大規模な船団を組織し、南極大陸への移住を実施した。日本人の顔をした一団は、南極に辿り着き、レメクやユピテルの王統と共存した。この大航海時代により、アラビア人の顔をしたウラニアーから「ノア」、カンボジア人の顔をしたチャム族から「セム」、ヴェッダ族とアミ族の連合によって「ハム」「ヤペテ」が南極大陸に生まれた。

#### ■大地殻変動 タナトスを嫌悪する余りに地軸を揺らした科学の種族

その後、最終戦争ラグナロクやアトランティス王国の破壊を経て、科学の種族エラド、マハラエル、トバルカインが、強大な核兵器を使用し、地軸の移動を実行した。彼らは、汚らわしいタナトスを嫌悪する余り、南極大陸にタナトスが存在しない、美しい人々、優れた人々しか住まないユートピアを築こうとしたのだ。旧世界から切り離された、南極の立地条件を高評価していた彼らは、凍りついた残り半分の大地も有効活用できるように、地軸を揺らし、南極大陸全体を完全に北方に移動しようと考えたのだ。

だが、地軸は揺れたものの、彼らの思惑とは異なり、南極は逆に南方に移動した。その上、急激な地軸の移動によって地球規模の大地殻変動が発生し、北極と南極の氷が一度に溶解したために、世界中の沿岸部が9日間、海の底に沈んだ。その後、南極大陸は現在のように完全に凍結した。この時、来るべき世界に対する準備を整えていた文明放棄組は、それぞれの船団を新天地に向けて発進させた。

その後、完全に凍結し、主を失った南極大陸は、ペンギンしか住んでいないように思われている。だが、宇宙の冒険から戻った科学の種族が再度、居住している可能性がある。月、金星、火星にさえ居住することができる人々なワケで、ましてや、南極は地球上にある大陸だ。例え、全土が氷付けの極寒の世界であっても、彼らにとって住むことくらい容易いことだろう。



### インドの超古代史

#### ■ヴァラナシ 天空神ウラヌスの故郷～ジョン・レノンの故郷

ウラヌスは、オロクンとエスの連合によってオーストラリアに生まれた。ウラヌスの名の由来はアルキュオネウスと同じ、オロクンとエスの組み合わせである。である。オロクン+エス=オロクノエス=オロノエス=ウラヌスとなる。バングラデシュ人の顔をしたウラヌスはガンジス流域に移住し、「ヴァラナシ」を築いた。その後、ウラヌス、は獣人の部族キュクロプス、ヘカトンケイル、ポントス、テテュスを従え、ガイア、ジュオクが待つ古代ギリシアに向かった。7万年前のことである。「神統記」に記されたウラヌス、キュクロプスらは獣人であり、ヘカトンケイルは小型獣人オラン・ペンデクとバントゥー族の祖であり、テテュスはメラネシア人であった。古代ギリシアに到着したウラヌスはテテュスと連合して「ティタヌス（ティタン神族）」を結成した。テテュス+ウラヌス=テテュヌス=ティタヌス=ティタンとなる。また、ウラヌスは、アカイア人と連合して「オケアーノス」を生んだ。アカイア+ウラヌス=アカイアヌス=アカイアーヌス=オケアーノスとなる。

その後、ウラヌスはギリシア追放、大地殻変動を経験し、紆余曲折を経て「バラーナ族」としてアーリア人の軍団に参加している。このバラーナ族から、ビートルズのジョン・レノンが生まれることになるが、レノンに至る名前の変遷を見てみたい。バラーナ（アーリア人）=パルニ（イラン）=春名（日本）=ブレナン（ブリテン島）=レノンとなる。

#### ■ヴァナラシ 小野氏、奈良の語源～ヨーコ・オノの故郷

人喰い人種クロノスの姦計によってギリシアの覇権を喪失し、天空神ウラヌスがインドに帰還した際、残留していたヴァラナシの人々はギリシア帰りのウラヌスと差別化するため、自らを「ヴァナラシ」と呼んだ。ヴァナラシ人は、台湾に移住して「ブヌン族」を生んでいる。ブヌンの名の由来はヴァナラシである。ブヌン族は後に2つに分裂した。一方はブリテン島に移住して「ペルセポネ」を生み、一方は大地殻変動の際に黒龍江に移住し、「垂仁天皇の大移動時代」に参加してメソポタミアに入植した。この時に「至高神アヌ」が生まれた。ブリテン島のペルセポネも大地殻変動の際にメソポタミアに移住し、「テリピヌ」を生んでいる。

2つに分かれたブヌン族がメソポタミアの地で再会したわけだが、アヌは「アヌ族」としてアーリア人に参加し、テリピヌは「パニ族」としてアーリア人に参加した。ヴァナラシのアヌ族、パニ族、そしてヴァラナシのバラーナ族が一堂に会し、アーリア人の軍事組織に参加した形だ。紆余曲折の後、イラン、モンゴルを転々としたアヌ族とパニ族は最終的に日本に入植した。アヌ

族は、大和国に「奈良」を築き、「小野氏」を称した。そして、パニ族は「タートルから来たパニ」に因み、「橘氏」を生んだ。タートル+ヴァナラシ=タタヴァナ=橘（たちばな）となる。小野氏からはヨーコ・オノが生まれているが、ヨーコとジョンの出会いは、お互いが先祖の血に導かれたのは間違いない。

#### ■ドラヴィダ族 聖地デルポイから亡命した人々

タナトスの血を引く、虚言症を患うクロノスは、獣人の部族「キュクロプス」「ヘカトンケイル」、そして、彼らを完全に掌握しているガイアに警戒感を抱いていた。そこでクロノスは、兄弟である（神統記では父だが）ウラヌスに「キュクロプスたちが謀反を企んでいる」「暴れられたら、獣人の部族を退けることは容易ではない」など、不安で心をかき乱す虚言を吹き込んだ。クロノスの言葉に危機感を覚えたウラヌスは、即座にキュクロプス、ヘカトンケイルたちをギリシアから追放した。しかし、ガイアはウラヌスの勝手な行動に憤慨した。そして、激怒しているガイアに、クロノスがそっと背後から接近した。

クロノスは、ウラヌスを追放するためにガイアとの連合を打診した。こうして、陰謀によってウラヌスを排除し、ガイアを配下に置いたクロノスは、古代ギリシアを統べる王となった。そう。クロノスは、全てを手取るように操作していた。この、タナトス一族の人間の心理を見抜く洞察力、昆虫でも観察しているような冷徹なまでの観察眼には脱帽モノである。ウラヌスによる追放を機に、獣人たちはそれぞれの故地へ帰還した。キュクロプスはインドに、ヘカトンケイルは東南アジアに帰還している。そして、クロノスに敗北したのを機に、ウラヌスはデルポイ人と共にガンジス流域に帰還した。

#### ■ナーガ族 南極の凍結～インドにムー帝国の伝説を伝えた人々

大地殻変動の際、「エノクの大航海時代」に参加して東アジアを目指したエノクだが、彼らは東アジアを通過してインドに入植した。彼らは「ナーガ族」となった。ナーガの名の由来はエノクである。エノク=エノク=エノーグ=ナーガとなる。ナーガ族は、南極の凍結と大地殻変動、故郷であるムー帝国の滅亡をインド人に伝えた。その後、ナーガ族はミャンマーを訪れてシャン族と連合し「長脛彦」を生み、中国に「殷・商」を建設している。長脛彦の名の由来はナーガとシャンノ組み合わせである。ナーガ+シャン+彦=ナガシャネ彦=長脛彦となる。長脛彦が残した子孫には犬養氏、中曽根氏がいる。

#### ■シバの王国 葦原中津国の人々がパンジャブに築いた国家

大地殻変動後、アシアーは故地である葦原中津国を脱出し、インダス流域に入植した。アシアーは、パンジャブに「シバの王国」を築いた。アシアーはこの時に「イーシュヴァラ」を生んでいる。イーシュヴァラの名の由来は葦原である。シバの王国はプント国と同盟関係にあった。そのため、彼らの国があった土地はパンジャブと呼ばれた。プント+シバ=プンシバ=パンジャブとなる。

## ■プント国 獣人パンドラがパンジャブに築いた国家

メソポタミアを経てモンゴルから来た、獣人の姿をしたパンドラは、インダス流域に「プント国」を築いた。彼らはシバの王国と同盟関係を結び、「マハーバーラタ戦争」の時代には、パーンダヴァ族となっていた。彼らは、だが、魔神アスラ、ヤクシャのタナトス連合軍のインチキ宗教に支配され、無謀にも、科学の種族に挑戦することを強いられた。プント+シバ=プントバ=パーンダヴァとなる。プント国のパンドラからは「ヴァンダル人」が生まれている。

## ■第2代テーバイ王国 サハラ砂漠と化した故郷からの亡命者～インダス文明

BC 32世紀、生活の保障を得るために、進んで悪に服従していた愚か者たち（タナトス信者）を焼き尽くすべく、科学の種族はソドム、ゴモラ、テーバイ王国などの伝説の王国と共に大量の信者たちを核兵器で焼き尽くした。その後、サハラ砂漠などができたのだが、故地を離れたトバルカインは、シバの王国、プント国があるパンジャブに移住し、第二の「テーバイ王国」を建設した。トバルカインはこの地で「善神デーヴァ」と呼ばれた。進んだ科学力を誇っていた善神デーヴァだが、彼らは現地人に文明の利器を与えるのではなく、難解なメッセージを送ることにより、優れた者を保護し、できそこないを淘汰した。これにより、優れた者が、その才気を遺憾なく発揮することができた。そのため、洗練された都市計画の下、インダス文明は繁栄し、シバの王国、プント国と深く交流を重ねた。

## ■アーリア人の国 神々の種族の連合軍

「十王戦争」とは、アリナ族（アーリア人）、プール族（スバル人）、ブリグ族（ペレグ）、ドルヒユ族（トロイア）、パルシュ族（ペルシア）、ダーサ族（テュロス）、パニ族・アヌ族（ヴァナラシ）、バラーナ族（ヴァラナシ）の連合が、バーラタ族（エピアルテース）、トリツ族（ティルス）と繰り広げた戦争のことである。だが、バーラタ族の背後には、デニエン人（アラスカ・ダナーン族）が潜んでいた。デニエン人は「ダヌ」を祀り、トリツ族、バーラタ族の2種族を信者として獲得していた。インフラを掌握されたバーラタ族はデニエン人に逆らうことが

できず、仲間と交戦するはめになった。デニエン人の目的はアーリア人の完全支配である。まず、バーラタ族はデニエン人の命令で身内を殺し、それを十王のせいにした。その上で、悪の成敗という名目でバーラタ族・トリツ族の連合体は、十王の連合軍に宣戦布告した。人喰い人種に魂を奪われた仲間のことを危惧した十王の連合は、ダヌを祀るデニエン人を討とうとするが、ダヌを守る城壁と化した仲間（バーラタ族、トリツ族）を殺すことが出来なかった。このため、十王の連合軍は敗北を喫した。しかし、マハーバーラタ戦争で使用された核兵器によって全てはチャラになった。これにより、デニエン人は中央アジアに逃亡し、崩壊したアーリア人の連合体は各地に四散した。だが、祖を同じくするプール族はデニエン人から解放されたバーラタ族と合体し、「クル族」を結成した。

## ■ パンダヴァ族 タナトスの指揮下に落ちたプント国、シバの王国の連合軍

「マハーバーラタ戦争」は、アッシュール・ダン1世が王位を喪失したBC1134年からアッシュール・ダン2世が即位したBC934年までの二百年の間に勃発した。善神デーヴァ族が駆使する科学の力に目を奪われた魔神アスラ族は、流麗なウソを並べて善神デーヴァ族に取り入り、全てを篡奪した上で恩を仇で返した。空中要塞「黄金の都ヒラヤンプラ」を造らせた上で、そのまま居座った魔神アスラ族は手に入れた近代兵器を駆使して世界征服を標榜したのだ。この暴挙に驚いた善神デーヴァ族は、獣人アルキユオネウスの子孫である青年アルジュナにヴィマナ（UFO）や強力な武器を与え、魔神退治を指示した。この時、魔神アスラは、プント国とシバの王国に獲得した大量の信者を動員し、アルジュナの軍と戦わせた。プントとシバの信者たちは「パンダヴァ族」と呼ばれた。パンダヴァの名の由来はプントとシバの組み合わせである。プント+シバ=プントバ=パンダヴァとなる。

英雄アルジュナと善神デーヴァの働きにより、夜叉（ヤクシャ）、羅刹（ラクシャサ）、阿修羅（魔神アスラ）は、パンジャブを後にした。魔神アスラは、アッシリアに帰還すると、アッシュール・ダン2世が生まれ、再びアッシリア帝国を掌握している。このアスラ族による裏切りの一件が善神デーヴァ族に「あんなウソツキと一緒に地上には、もう住みたくない」と思わせ、宇宙に進出させる契機となった。その後、伝説の王国が消滅したインドで再び国家が歴史に登場するのは、BC9世紀である。この時に、コーサラ王国、マガダ王国などが出現している。

超古代正史 伝説の国編

<http://p.booklog.jp/book/118502>

著者：大本正 (C) masahiro taguchi

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/danejin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/118502>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト